

# 2015 年度夏期

# 鳥取大学 GLOBAL GATEWAY PROGRAM

# 報告書



## 鳥取大学グローバル人材育成推進室

文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」採択事業





目次

<b>夏期アメリカ英語研修</b> .....	<b>1</b>
福田 咲紀 医学部生命科学科 (2014年度入学) .....	2
原 小百合 医学部生命科学科 (2013年度入学) .....	3
橋本 淳子 工学部物質工学科 (2013年度入学) .....	4
久本 晴加 工学研究科 (2015年度入学) .....	5
川村 紗瑤 工学研究科 (2015年度入学) .....	6
<b>夏期カナダ英語研修</b> .....	<b>7</b>
井上 智絵 医学部保健学科 (2015年度入学) .....	8
岩本 有平 工学部機械工学科 (2013年度入学) .....	9
吉田 沙生 医学部医学科 (2013年度入学) .....	10
玉田 菜那 医学部医学科 (2015年度入学) .....	11
隅谷 将之 工学部電気電子工学科 (2011年度入学) .....	12
佐藤 史歩 医学部生命科学科 (2015年度入学) .....	13
坂 矩 農学部生物資源環境学科 (2015年度入学) .....	14
小林 利沙子 工学部化学バイオ系学科 (2015年度入学) .....	15
植田 祐子 医学部医学科 (2015年度入学) .....	16
増田 里穂 工学部社会システム土木系学科 (2015年度入学) .....	17
大川 楓貴 医学部保健学科 (2014年度入学) .....	18
渡辺 大修 地域学部地域文化学科 (2014年度入学) .....	19
木下 遥 地域学部地域教育学科 (2014年度入学) .....	20
木内 美月 工学部物質工学科 (2014年度入学) .....	21
佛生 光 工学部機械工学科 (2014年度入学) .....	22
米村 友恵 工学部物質工学科 (2014年度入学) .....	23
<b>夏期マレーシアマラヤ大学英語研修</b> .....	<b>24</b>
浦田 優 工学部電気電子工学科 (2014年度入学) .....	25
岡村 華世 医学部生命科学科 (2015年度入学) .....	26
景山 和仁 工学部知能情報工学科 (2013年度入学) .....	27
古河 ゆり 医学部保健学科 (2015年度入学) .....	28
合田 富美子 工学部生物応用工学科 (2014年度入学) .....	29
佐藤 大地 工学部物質工学科 (2013年度入学) .....	30
三浦 拓海 工学部機械物理系学科 (2015年度入学) .....	31
糸井 理彩 農学部生物資源環境学科 (2015年度入学) .....	31
西村 ひかる 農学部生物資源環境学科 (2015年度入学) .....	33
中川 貴裕 工学部社会開発システム工学科 (2013年度入学) .....	34
長島 大地 工学部電気電子工学科 (2013年度入学) .....	35
苗村 朱莉 農学部生物資源環境学科 (2013年度入学) .....	36
片岡 寛晶 工学部機械物理系学科 (2015年度入学) .....	37

## 2015 年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

<b>夏期台湾銘傳大学中国語研修プログラム .....</b>	<b>38</b>
永田 莉香子 工学部生物応用工学科 (2014 年度入学) .....	39
宮川 紗綾 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	40
玉櫛 奈緒子 地域学部地域政策学科 (2014 年度入学) .....	41
桑原 知弘 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	42
合田 剛 工学部社会システム土木系学科 (2015 年度入学) .....	43
鋤田 千咲 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	44
長野 望江 工学部電気電子工学科 (2014 年度入学) .....	45
田中 祐生 工学部機械物理系学科 (2015 年度入学) .....	46
杉浦 里歩 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	47
嶋津 裕樹 工学部社会開発システム工学科 (2013 年度入学) .....	48
辰己 竜太郎 工学部機械物理系学科 (2015 年度入学) .....	49
小林 和生 社会システム土木系学科 (2015 年度入学) .....	50
<b>ウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラム .....</b>	<b>51</b>
安藤 杜之介 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	52
加藤 みな美 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	53
吉田 のぞみ 医学部保健学科 (2013 年度入学) .....	54
橘 頼之 工学部生物応用工学科 (2014 年度入学) .....	55
金山 昌央 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	56
秋本 弘太 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	57
小山 美佳 農学部共同獣医学科 (2013 年度入学) .....	58
深井 彩代 農学部生物資源環境学科 (2013 年度) .....	59
曾田 真澄 医学部保健学科 (2015 年度入学) .....	60
<b>夏期大山短期集中英語研修 .....</b>	<b>61</b>
岡田 遥江 農学部共同獣医学科 (2013 年度入学) .....	62
広瀬 幸音 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学) .....	63
稲垣 岬 農学研究科 (2013 年度入学) .....	64
岡本 珠里 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	65
森川 彩 工学部生物応用工学科 (2012 年度入学) .....	66
成田 一貴 工学部知能情報工学科 (2010 年度入学) .....	67
大津 彬 工学部機械工学科 (2014 年度入学) .....	68
長崎 智菜 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学) .....	69
田邊 周 工学部社会開発システム工学科 (2014 年度入学) .....	70
東谷 洗里 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学) .....	71
箱谷 安耶 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学) .....	72
平井 遥夏 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学) .....	73
米村 明畝 地域学部地域政策学科 (2013 年度入学) .....	74
富永 貴哉 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学) .....	75

## 夏期アメリカ英語研修

国・地域：アメリカ合衆国

研修機関：カリフォルニア大学デービス校

参加者数：5 名

期間：2015 年 8 月 7 日（金）～9 月 4 日（金）

内容：夏休みにアメリカ、カリフォルニア大学デービス校（UC デービス）エクステンションで開講される英語研修「Communication and Culture Program」に参加しました。1 日 4 時間の英語の授業の他、放課後（16:30～）は Movie and Popcorn や Conversation Club、Ice Cream Social などのアクティビティーがあります。滞在中はアメリカ人の家庭にホームステイし、アメリカの文化に触れながら日々の生活の中で生きた英語の習得が期待できるプログラムになっています。

なお、プログラム開始時に実施されるプレイスメントテストでレベル別に分かれてプログラムを受講できますので、初心者から上級者までレベルにあった内容で研修が受講できます。



福田 咲紀 医学部生命科学科 (2014 年度入学)

今回の留学は、英語でのコミュニケーションスキルだけでなく論文やプレゼンテーションなどのアカデミックなスキルを英語で身に付けたいという思いあって決めた。だが、このプログラムに参加したことでこれらのスキルを学べただけでなくたくさんの人と出会い、世界中に一生の友達ができただけは私の一番の宝物となった。

アメリカ人の家庭にホームステイし、クラスには日本人以外に台湾・インドネシア・バーレーンからの学生もいたため、私は一日中英語しか使えないという環境に置かれていた。最初のうちは自分の話す英語に自信がなく、会話は早く切り上げたいと思っていた。しかし、クラスメイトと仲良くなるにつれて何としてでも伝えたいという気持ちが強くなり、どんどん話すようになった。毎日ランチタイムはキャンパスに広がる芝生で、クラスメイトと一緒にしゃべりながら食べた。この時間は一日のうちで一番好きな時間で、私のスピーキングスキルを一番成長させたのではないかと考えている。



Figure 1. Lunch time

授業は1日4コマあり、アメリカの文化や社会、MLA や APA という英語論文を書くための書式を学んだ。もちろんすべての授業と友達との会話は英語で行われるのでライティング・リーディングそしてコミュニケーションのスキルは自然と身に付いていった。授業最終日にはアメリカ文化について自分がリサーチしたことを、パワーポイントを使って10分間プレゼンテーションをしなければならなかった。「英語で10分間プレゼンなんて無理」と最初の頃は思っていたが、プレゼン当日は緊張することもなく楽しくすることができた。質問にも答えることができ、気づいたら20分近くもクラスの前に立っていた。宿題は毎日出され、ほとんど翌日には提出しなければならなかった。クラスメイトはもちろん、カフェテリアで勉強に励んでいる UC Davis の学生を見て自然と自分もやらなければ、という気持ちになり勉強する習慣が身についた。

アメリカの大学で一か月生活し、大学院は絶対アメリカに進学するのだ、という気持ちが強くなった。クラスメイトの中に、このプログラムを終えるとアメリカの大学院に進学するという人がいた。その人も私と同じように学生時代に5週間の留学に参加し、その時にアメリカの大学院に進学すると決めて実現させている。今の成績ではアメリカの大学院進学はとても難しい。今回の留学で経験したことをこれからの勉強に活かしてこの夢を実現させたい。



Figure 2. Hanging out with my host family



Figure 3. My friend who goes to graduate school in the U.S.

原 小百合 医学部生命科学科 (2013 年度入学)

今回のプログラムでは、カルフォルニア大学デービス校にてプレテストによって細かく分けられたクラスで自分に合った英語学習をしました。授業は一日 4 科目あり、毎日同じスケジュールで行われました。それぞれ先生が異なり、教える内容も様々ですが、どの先生もユーモアに溢れ、とても楽しい授業でした。授業内容は、ペアワークをしたり、意見を発表したり、プレゼンテーションを行うなど、アメリカならではの授業だと感じました。

最後の週には各授業でプレゼンテーションを行いました。Intercultural Research Project の授業ではプレゼンテーションのための事前調査では UC デービスの学生に聞き取り調査を行いました。初めは話しかけるのに勇気が必要でしたが、フレンドリーな人が多く、緊張せずに話しかけることができるようになりました。さらに、聞き取り調査をしている間にいろいろな話を聞くことができ、とてもいい経験になりました。

また、デービスに滞在している間はホームステイ先で生活し、アメリカ人の日常生活を垣間見ることができ、異文化理解にとっても役立ちました。ホームステイ先はホストファザーとホストマザー、娘 2 人と犬 2 匹がいる家族で、明るく賑やかで、毎日楽しく生活できました。初めは



自分の英語力に自信がなく、聞かれたことに対して首を縦や横に振って返事をしていました。しかし、ホストファミリーとの会話が増えていくうちに、今日あった出来事などを自分から話したり、日本のことを話したりできるようになりました。実際にネイティブの人の前で拙い英語を話すとき聞き取ってもらえないこともありましたが、何度も言い方を変えてみるなど、伝える努力をすることで不自由なく生活できました。

大学生になってから、英語学習をする時間が減り、英語で話すときに思うように単語が出てこないことがよくありました。以前は知っていた英単語や文法を徐々に忘れていっていることに気付かされ、帰国後は英語学習を積極的にしていこうと思いました。



## 2015 年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

橋本 淳子 工学部物質工学科 (2013 年度入学)

今回プログラムに参加して、1 番の成果として、以前よりもネイティブの発音が聞き取りやすくなったことと、英語で話すことにあまり抵抗を感じることなく以前よりも話せるようになったことだと思う。現地ではホームステイで、大学の授業時間内だけでなくアメリカ人家庭での会話の機会も多く、日常的に美英語が密接していたと感じる。私のホームステイ先は、ホストマザーと犬二匹だけの家庭であったが、中国人の留学生が 2 人と、もう一人の日本人の合計 5 人で住んでいた。ホームステイは最初自分一人だと思っていて、現地で自分以外に 3 人ステイ先が一緒だと聞いてとてもびっくりしたが、中国人とのコミュニケーションは英語でしか出来なかったため、とても良い経験になったと思う。また、UC Davis の学生や、同じプログラムに参加した学生とも会話する機会があり、生活的な面も加えて英語に触れられる機会がたくさんあったため、自然に英語が身についたと感じる。

大学の授業は自分のレベルに合ったクラス編成がされ、授業はとても分かりやすく、英会話に重点が置かれていたので授業中に眠くなることも無く、とても面白かった。授業を通して、プログラムの参加生とも仲良くなることも出来て、良かったと思う。大学の授業時間内で US カルチャーに触れながら英語を学んだり、文化をリサーチしたりして発表したりして、アメリカの文化に触れながら知ることができた。発音の授業では、ネイティブの発音を学び、自分の発音を正しく直すことができたのでとてもうれしく感じる。また授業時間や宿題で、ネイティブがよく使うイディオムや日常表現などを学ぶことができた。

1 ヶ月間ホームステイをすることで、アメリカ人の生活や習慣だけでなく、ホストマザーの気遣いや考え方、優しさなどに触れることができ、とても貴重な体験ができたと思う。同じホームステイ先の中国人とも仲良くなることができ、同じ時間を共有できたことも良い経験になった。

ヨセミテ国立公園や、サンフランシスコ、ロサンゼルスへツアーに参加し、アメリカの自然や歴史、文化に実際に触れることもできた。

また、他大学や他国の学生と関わり、また英語で会話することで、今後の課題も見つけることも出来た。英語はどこに行っても、これからの将来にも、必要になってくるツールだと改めて感じたのでこれからも勉強を続けていきたいと思う。また、異文化にふれ、受け入れることにもなれたので、英語はもちろん、今回の研修で身につけたものを忘れず、次の機会や将来に活かしていきたいと思う。





久本 晴加 工学研究科 (2015 年度入学)

私はこの夏期アメリカ英語研修に参加する前はアメリカで毎日ハンバーガーやステーキなどを食べながらどちらかというと派手な生活を送ることを想定していました。8月にカリフォルニア州のデービスに到着し、ホストファミリーと生活を始めていくうちに実際のアメリカの生活を体験すると共に多くの事を学ぶ事が出来ました。節水や家での野菜を中心とした食事などホストファミリーによってそれぞれ違いはあると思いますがイメージとは異なる事が多々ありました。A penny saved is a penny earned. ということわざを習いましたがアメリカと日本の価値観の違いを感じました。日本で生活する中で多くの無駄遣いを自ら行っている事を改めて痛感しました。毎週日曜日にはホストファミリーが教会へ連れて行ってくれました。緊張し、行く事を迷いましたが何事も体験してみるべきであると思い連れて行ってもらいました。体育館ほど広い教会では入りきらないほどたくさんの方が毎週集まっていました。様々な人種の人達が集まり一緒になって祈り、歌い、会話を楽しむ姿はとても新鮮でした。行くたびに、初めましてと声をかけてくれたり色々な事を教えてくれたりと優しい人が多く、アメリカの人たちの心の広さや社交性を感じました。また、日々生活する中では、バスに乗る時や買い物の際、扉を開けてくれた際等に人と挨拶やお礼を交わす事が日本と比べてとても頻繁にありました。生活を通して価値観の違いに戸惑う事も多くありましたが、人とコミュニケーションを取る事の大切さや楽しさを改めて感じる事が出来ました。このような基本的な事が今、自分が日本で送っている生活において減っていると実感し、今後から大切にしたいと思いました。



語学だけでなく、それ以上に異文化を受け入れる事、人とのコミュニケーションの大切さを新たに学ぶことが出来、非常に貴重な経験ができ多くの人に感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいです。また更なる語学の勉強を行っていきたくないと深く感じました。



川村 紗瑠 工学研究科 (2015年度入学)

今回の語学研修を経て、まず行く前のビザの申請から初めてのことばかりで、向こうに行って2,3日は移動手段や身の回りの違い等に戸惑うことが多く、これからやっていけるのか、楽しみより不安の方が勝っていました。私のホームステイ先はバスを乗り継いで学校にたどり着く場所にあったので、特にバスの乗り方は、初めての私にとって難しく慣れるまでかなりかかりました。しかしこれは実際に体験してみなければ分からず、また現地の人に聞くことが重要だと実感できました。

大学での授業は今まであまり触れてこなかった発音について詳しく学ぶことが出来、日々会話をする上で非常に勉強になることが多かったです。クラスは英語研修の期間であったので、圧倒的に日本人が多かったのが残念でしたが、なるべく英語で会話するよう心がけ、またホームステイだったので早目に家に帰って日常の多くの時間を家族と過ごせるようにしました。

英語での会話に際して、初めは上手く文章にして話さない！とかたく考えすぎていた為、答えるのに時間がかかったり、スムーズに会話が続きませんでした。慣れてくると一度日本語で考えた後、英語にするというプロセスを経ずに徐々に話せるようになってきていた気がします。しかし、やはり一ヶ月は短いもので、何事にもちょうど慣れてきた頃合いでのさよならとなってしまいました。すべてが新鮮なまま思い出となったことはよかったかなと思いますが、せっかくの語学研修をこのまま放っておくとただの旅行になってしまうのでこれからどのようにして会話のトレーニングまた、英語の学習を続けていくかは今考えているところです。

また、アメリカは様々な人種の人々が暮らしており、色々な文化に触れあうことができとても新鮮でした。特にバラエティに富んでいたのが食文化な気がします。アメリカの代表的な食事であるハンバーガーに始まり今まで食べたことのなかった国の料理まで幅広く挑戦できたのはいい経験だったと思います。

今回、留学に際し、大学で事前に聞く人もおらず向こうでの内容もほとんど知らされていませんでした。私はアメリカ渡航が全くの初めてであり知らないことが多かったこともありますが、ある程度の内容はざっくりではなく、もっと詳しく知っておきたかったと思いました。また来年からは今年の経験談も踏まえ、もっと事前に詳しく知れる機会を作っていくべきだと強く感じました。

## 夏期カナダ英語研修

国・地域：カナダ

研修機関：ウォータールー大学

参加者数：17名

期間：2015年8月6日（木）～8月31日（月）

内容：カナダ・ウォータールー大学にある Renison University College で4週間の英語研修を行いました。1日5時間の英語の授業で集中的に学習し、英語の実践的な能力を磨けるプログラムになっています。プログラムには夕方のアクティビティや週末のナイアガラファールズ・トロント等への小旅行も含まれているのでカナダの文化や自然に触れることもできます。

また本プログラムにはいろいろな国からの学生が参加しますので、国際的な友達作りにも良い機会です。初級から上級までの5つのレベルにクラス分けを行うため、初心者でも安心して参加できるようになっています。



井上 智絵 医学部保健学科 (2015 年度入学)

私にとって今回の語学研修は、「話す」ということに焦点をおいた、実践的な英語能力を身に付けることはもちろん、積極性やコミュニケーション能力も向上させるとても良い機会となりました。約1か月という期間は、海外経験が初めての私には少し長いと思っていましたが、実際そう感じることはなく、あっという間の1か月でした。

授業は、講義形式の時間はほとんどなくグループワークが中心で、どの授業でも、先生の問いかけに対し学生がロ々に自分の意見を発言するというスタイルがとられました。外国人は発言力があると聞きますが、まさにその通りで、周りのクラスメイトが次々と発言する姿に大きな刺激を受けました。そして、自分もと思うのですが、私は普段から人前で発言することが得意ではなかったので、なかなか発言できませんでした。また、慣れない英語ということもあり、先生に当てられたときでさえ、自分の考えをうまく伝えられないことが続きました。けれども、言葉に詰まったときには、私が言おうとすることを推測して導いてくれるなど、先生やクラスメイトの助けのおかげで、徐々に話せるようになっていきました。そしてグループワークの際にも発言することが増えていきました。

また、英語での会話が増えてくるにつれ、それまでは英語だから、伝えられないだろうから、などと思って最初から諦め気味だった自分に気付きました。片言の英語でも、ジェスチャー等を交えながら何とか伝えようとすることで、相手も理解しようと努めてくれ、少しずつでも分かり合えることを何度も経験しました。伝えられたときはとても嬉しく、相手も喜んでくれ、お互いに笑顔になれました。そして、コミュニケーションの際には、伝えようとする気持ち、理解しようとする気持ちが大切であると身に染みて感じました。

目に映るもの、経験する物事、何もかもが新鮮で、とても充実した毎日を過ごすことができました。最初は、慣れない英語で自分の思いを伝えられないもどかしさに大きな不安を感じていましたが、帰国後には、頭の中に浮かんだ考えを、無意識のうちに英語に変換しようとしている自分がいます。日本の生活に戻ると英語を話す機会は減ってしまうけれども、普段から意識的に、「これは英語ではどう表現するのだろうか？」と考えることを続けたいと思います。そして今後も、国際的な取り組みに関心を持ち、積極的に参加していきたいと思えます。



岩本 有平 工学部機械工学科 (2013 年度入学)

カナダに行くことによって、自分に対して日本にいるときと違った価値観で見ることが出来ました。約 20 年間日本という環境の中にいましたが、一ヶ月カナダにいて、日本と全く違った環境であり、自分に対して少し客観的に物事を見られるように感じました。



自分のクラスでは英語を学ぶことはもちろんの事、特にカナダの授業は主体的に授業を受けなければならないように感じました。自分に今何が足りないのか何が長けているのか、先生によって評価されたシートを見て授業の後に自分で考えることがありました。先生との距離が非常に近いように思いました。

また、外国人の人達と授業を受けていると日本人だけで受けている授業とは異なった授業を受けることが出来ました。自分とは違い、外国人は自分の意見をしっかり持って主体的に授業を受けていました。自分の意見や答えがたとえ周りとは違っていても授業中に自信をもって発表していました。

自分に今何が足りないのか何が長けているのかを少し見つけることができたので日本に帰ってきて日々意識していくべきことや本などで学んでいけるものは、どんどん吸収して知恵として使えるように頑張りたいと思います。

カナダにいて「習慣」の大切さも感じました。例えば、食生活や生活時間などの文化による習慣の違いなどです。毎日何気なくしていることがどれだけが重要なのが分かりました。今日本で何気なく毎日生活していますがそれらを少しでも変えていければ良いと思いました。



これらのことがカナダに行って考えさせられました。自分を見つめなおす機会がカナダに行って増えたように感じました。大学は高校に比べて日々の生活の自由度が高いのでそれらのことを改善していけるように日々気をつけて頑張りたいと思いました。将来は世界で活躍できるエンジニアになりたいと思っているので今回の研修でよりいっそう強くなり行ってよかったですと思いました。これらの経験を特に英語の必要性和自分磨きのために使っていきたいです。

## 2015 年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

吉田 沙生 医学部医学科 (2013 年度入学)

留学前はプレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなど、大勢の前での発表や、あるお題に対して自分の意見を述べるのが苦手だと感じていた。しかし今回の研修の授業では、ディスカッションがほぼ毎日あった。その場でお題が与えられ、2人1組となって先生の合図で賛成側と反対側を交代するものから、グループにわかれ、その中の一人がリーダーとなり、他の人の意見を聞いたり、結論を述べたりするようなものもあった。初めの方はとても緊張したが、回数を重ねるごとにコツをつかんできて楽しささえ感じる事ができた。また、プレゼンは、5分間考える時間が与えられ、3分プレゼンをするものと、1人15分のプレゼンをするものがあった。15分のプレゼンは、パワーポイントの準備や資料の準備などが必要だったが、それ以上に15分という長さのために聞き手側が途中で飽きてしまわないように、途中で質問を投げかけたり、動画をいれたりする工夫が大切だと気づく事ができた。これからもプレゼン、ディベート、ディスカッションをする機会はたくさんあると思うので、今回の研修で学んだことを生かしたい。

また、1クラス約20人だったため、授業後は、一緒にショッピングモールに出かけたり、映画をみたり、ビリヤードをしたりと、とても仲良くなる事ができた。日本に興味をもってくれている人が多く、“これは日本語でなんと言うの？”や“日本のこの歌手が好きだよ！”などと話しかけてくれた。香港、中国、サウジアラビア、リビア、トルコなどさまざまな国から留学生がきていて、相手の国の文化の違いも知ることができたし、今まで行ったことのない国が少し身近に感じられるようになり、興味を持つきっかけとなった。

1ヶ月がとても短く感じ、毎日驚きや発見の連続で、今回の留学は自分の人生の中で本当に貴重な経験になったと思う。しかし、英語を話す機会がたくさん与えられたからこそ、自分の語学力不足を痛感した。これから一生懸命語学を学び、今回できた友達と次会うときに、もっとたくさん話ができるようになっていたらいいなと思った。



玉田 菜那 医学部医学科 (2015 年度入学)

医学科に入学し、医学の勉強はもちろん、せっかく高校まで頑張ってきた英語を勉強し続けたいと思っていた。英語の授業の少なさにショックを受け、このままではだめだ、何かしたい！と思い、このプログラムに申し込んだ。

研修先では様々な新しい体験が待っていた。着いたときには、まず日本にはそうそうない、自然溢れる広いキャンパスにびっくりし、これからここで3週間を過ごすのかと期待に胸を膨らませた。そして授業が始まった。ここで頑張っていくぞーと意気込んだのはいいものの、私が来る前から授業は始まっていて、みんなクラスの雰囲気慣れてる様子だった。黒板に書かれた文字を写すということが大半の日本の授業に慣れていて私はディスカッションとプレゼンテーションが中心の自由に発言し合う授業に最初は面食らってしまい、なかなか発言ができなかった。しかし、だんだんクラスメイトとも仲良くなり、授業の雰囲気にも慣れることができた。ネイティブスピーカーの先生から、様々な国から来たクラスメイト達と授業を受けることで、日本ではなかなか学ぶことができない、スピーキング力を伸ばすことができたように思う。また、これまで英語でのディスカッションやプレゼンテーションをほとんどしたことがなかったため、新鮮で学ぶことの多い授業だった。

友達になった香港の子達に聞けば、香港では幼稚園の頃から英語教育は行われているという。ドイツから来たクラスメイトに聞けば、ドイツではとてもスピーキング力を伸ばすことに力がいれられているという。グローバル化が進む中、自分の意見を多くの人にしっかり述べられるかどうかがとても大事だと感じる。授業中、多くのクラスメイトは母国語でも論じるのが難しい話題に対して、しっかりと自分の意見を持ち、英語で発信していた。私も負けていられないと感じた。大学の授業以外にもニュースを英語でチェックしたり、巷で売られている英語教材を活用したりと、英語を勉強する方法はいくらでもあると思う。日本語でも様々な社会問題について深く考え、しっかりと自分の意見を確立していきたいと感じた。

3 週間は思ったよりも短く、また今回は日本人の参加が多いプログラムだったためずっと英語漬けではなかった。一人でもっと長い期間海外に行ってみたいと感じた。今回の研修の経験を振り返り、大学生活がより充実したものになるよう、さらに頑張っていきたい。



隅谷 将之 工学部電気電子工学科 (2011 年度入学)

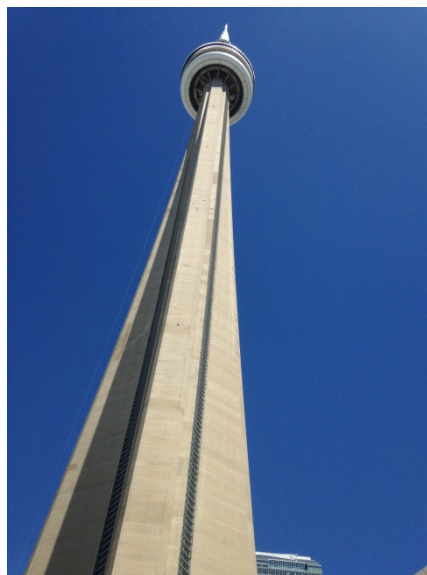
平日にカナダ人の先生による全て英語の授業が 5 時間あり、授業後は毎日アクティビティがあり、観光に行ったり、ショッピングモールに行ったりして外国人と交流しました。同じクラスにはサウジアラビア人と中国人がいたのですが、どちらの国の方々も日本人と比べて明るく社交的で、時間にルーズでした。また、自分を含めた日本人は文法が得意でスピーキングがかなり下手だと思いました。今後は定型文を耳に覚えさせ、今回できた外国の友達と英語で連絡を取り合うことで英語を修得したいと思います。

英語が聞き取れるようになったことや発音が良くなったこと、外国人とコミュニケーションが取れて、自信がついたことなどが成果です。日本で習った英語で海外では使われていない表現や、カナダで使われているイギリス英語についても勉強になりました。また、ジュスチャーやアイコンタクトなどのプレゼンテーションに必要なスキルも身に付きました。英語に関する様々なことがレベルアップしたので、中学生の頃からあった英語に対する苦手意識がなくなりました。

英語で飲食店での注文やショッピングモールの店員さんとの雑談、目的地までの道を尋ねること、バスに乗って目的地に行くにはどこで降りればよいかを尋ねることなど、日常生活レベルの英語ができるようになりました。また、有名なマーケットや、大学近くの森の中で映画を見るイベントや、ナイアガラや五大湖をはじめとした有名な観光地に行ったりとカナダでしかできない経験もたくさんしました。とても感動的な経験で、カナダに住みたいと思わせてくれるような場所ばかりでした。

今回留学をした理由は、将来技術者になったときに出張などで英語が要求されるので苦手意識をなくし、日常会話レベルの英語を修得するためだったのですが、この 3 週間で英語が好きになっていて、英語を使って仕事がしたいと思うようになりました。就職先も国内企業にしようかと思っていたのですが、今回の留学を通して、外資系の企業で働きたいと思うようになりました。また、世界の様々な情勢が身近に感じられるようになり、発展途上国を支援する仕事をしたいと思うようになりました。そのために鳥取大学に来る留学生の世話をするプログラムなどにも積極的に参加していきたいです。他の日本の大学からこのプログラムに参加していた人と友達になれたのも大きな収穫でした。

この縁を大切にしていきたいです。





佐藤 史歩 医学部生命科学科 (2015 年度入学)

カナダ英語研修に参加して、海外と日本の差を感じたことの一つに衛生面がある。日本は衛生基準が厳しいらしく、日本を当たり前と思って生活していた私にとってカナダでの生活は少し我慢が必要だった。しかし、現地の人々はフレンドリーで、その点はとてもいい文化だと思った。またカナダの夜は長かった。緯度が高いため夜8時までずっと明るく、先日まで6時には暗くなって体を休める体内リズムで過ごしていたため、大変に感じた。

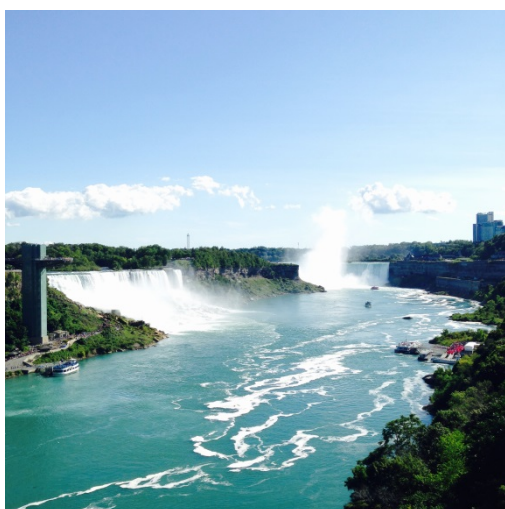
研修に参加したことで得られた最大の成果は、自分のスピーキングでは世界に通用しない、ということが分かったことだ。特に香港からの生徒がとても英語を流ちょうに話すのを聞いて、衝撃を受けた。私も彼らのようになりたいと思い、とにかく口を動かそうとしたが、何と言ったらいいかわからなかったり、言ったとしても伝わらなかったりと、ただただ自分の無力さを感じる日々だった。授業では、ディスカッションやディベートをしたり、エッセイを書いたりすることが多かったが、英語の力と関係なしに、もともと自分の意見を理論立てて話したり書いたりするのが苦手な私にとって、外国の方々のやり方を見たり、添削をいただけたのは本当によかった。

私は将来研究をしたいと思っていた。しかし今回の研修で、今自分に足りない二点が明らかになった。まずは英語力で、特にスピーキング。リスニングやライティングは受験勉強で扱っていないので、とても弱かった。今はグローバル化が進んでいるため、世の中で成功するというのは日本国内の話ではない、世界での話だ。そのため、英語力を鍛えないと、共同研究をすることはできないし、発表など様々な場面で支障が出る。二つ目に、文章力だ。特に理論立てて話すのが苦手だ。論文を書くにあたってもちろん必要だが、これからの人生においても人にわかりやすく話すことは大切だ。帰国後、英語を話す機会は断然減ってしまうが、文章力を付けることで、自分の夢に近づきたい。



坂 矩 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

事前研修の際に配られたしおりのとおり、本事業では一日五時間の集中講義で主にスピーキングとリスニングという、日本での授業ではなかなか延ばしづらいポイントを徹底的に学び、放課後と週末にあるアクティビティでは同大学の研修メンバーだけではなく、他大学、または他国の生徒たちとの交流が出来、英語とともに各国の文化など学べることも多い。生活に関して、食事は食堂で好きなだけ食べることができ、部屋は二人一組でストレスがかかることも少なからずあったが、雑談や課題をともに取り組むことができ、一生モノの友人が出来た。本事業の授業では、Speaking, Listening, Integrated, Presentation の四つのうち Speaking と Listening を一緒にした計三つのスキル別のクラスがあった。Speaking と Listening では身近な話題から少し難しい話題に関してディベートを行ったりと、将来グローバル人材になるにおいて重要なスキルを磨けた。Integrated Skill では主に文法を取り扱っていた。文法に関しては大学受験時に勉強したため自信があったが、授業の全てが英語のため新鮮なのはもちろんのこと、単語や熟語を別の英語で説明をしなければならなくてとても難しく感じられた。Presentation では 15 分間のプレゼンテーションという日本語でも難しい課題があり、英語、日本語ともに論理的思考を得られた。今回の研修で痛感したのは日本と他の国との英語教育の違いであった。日本では主に（ほぼ限定的に）文法やリーディングを学んでおり、ほとんど英語を話す、聞くという環境には巡り会えない。しかし、他の国に関しては授業が英語だけなのが当たり前というところも多かった。その為授業では、他の国の人には自分の思ったことをしっかり伝えることが出来るが、日本人は黙ってしまふことが多々あった。私はこれが悔しく、よく話せるルームメイトに相談したところ、音楽、ゲーム、映画など何でもいから英語に触れ、機会があったら率先して英語を話せと言われた。帰国後はこれを実践し日々を英語漬けにし、TOEIC や TOEFL で実践し、二年か三年かは定かではないが次は三か月のメキシコ研修に参加し、今回学んだこと、学べなかったことを生かしたいと思う。

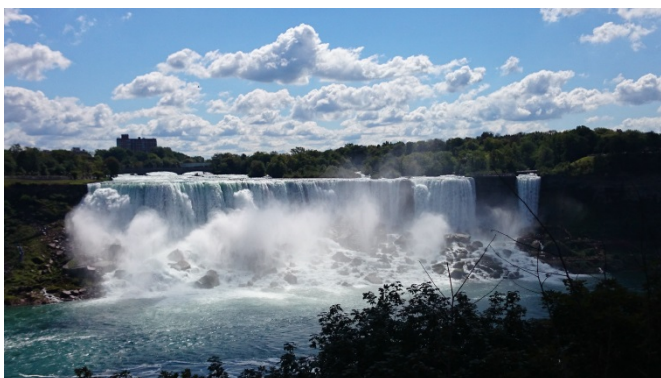


小林 利沙子 工学部化学バイオ系学科 (2015 年度入学)

語学研修に参加して最初に感じたことは、自分の語学能力の低さです。現地の店で、営業員が話す言葉は早すぎて聞き取れないし、また自分の英語も発音が下手でコミュニケーションが取れませんでした。授業でも、はじめの方は、先生の英語が聞き取れないこともよくありました。そのような時は、身振り手振りで伝えたり、授業の時は、正しく理解できるまで何度か質問をしたりして、なんとか対処しました。研修前に英語の勉強をしていたのですが、あまり役に立たなかったし、なりより恥ずかしかったです。研修を通じて、自分の海外の語学に対する認識を改めさせられました。また、文化の違いにも驚かされました。自分たちが当たり前だと思っていることが、他国の方々からしてみれば非常識だったり、反対に彼らが行っていたことが不快に思ったことがありました。自分の異文化への理解のなさに情けなくなりました。

しかし、研修ではさまざまな貴重なことを学び、経験することができました。自分の語学力を向上させるべく、国籍問わず色々な人と話をしました。特に授業中の休み時間はクラスメイトと積極的に話し、共通の話題で盛り上がったこともありました。香港のルームメイトともお互いの国のことを話し、異文化交流することができました。研修の後半、たくさんの人々とコミュニケーションを取り続けたおかげか、初めは聞き取れなかった先生の話も聞き取れるようになり、自信もつきました。また研修先がカナダという広大な国ということで、日没の時間が異なったり交通に対する認識が異なったりしていて戸惑うことは多々ありましたが、日本ではできないことも体験することができました。

この語学研修で、私の英語力はかなり上がったと思っています。この語学力を持続かつさらに向上させるために日本に戻ってからも自分で英語の勉強を頑張ろうと思います。また今回の研修を機に海外や異文化について興味をもつようになりました。これからは自分の力だけで海外に行きたい、と考えています。まだ1年生ですが、このような研修に参加できてとてもよかったと感じています。海外は初めてだったのでごく不安で、失敗も多かったですが、自分の見識を大きく変えた、大変貴重な経験になりました。この経験をただの思い出として終わらせず、新しい自分の第一歩として、これからの人生を送っていこうと思います。



植田 祐子 医学部医学科 (2015 年度入学)

「英語力」とは何か。研修前の私は、英語力は日常会話のための力だと思っていた。しかし、それは全くもって幼い考えだった。研修前、私は自分の英語力にある程度の自信があった。今までの国際交流を通して日常会話は出来る程度の英語力はついていたので。予想通り、日常会話に関しては問題なかった。しかし、授業ではわけが違った。最初の課題は、2 分間のスピーチだった。今までの日本の授業では、人前で即興のスピーチをすること、ましてや英語ですることなどなかった。完全に焦ってしまった私は、他の人とは比べ物にならないほど酷いスピーチをした。英語を流暢に話す以前の問題で、構想や内容が全くもってだめだった。あの日の悔しさは今でも忘れられない。

それからの授業で、私は他の人のスピーチを分析してみた。すると、みんな英語ではお決まりとなっている言い回し (transition) を効果的にスピーチに盛り込んでいた。それからというもの、どのような表現や言い回しがあるのか必死で覚えるようになった。もうあんな悔しい思いをしないうちに。

研修の最後、15 分間のプレゼンテーションをするという課題があった。これがリベンジのチャンスだと思い、ここぞとばかりに覚えたての表現を盛り込んだ。準備期間が短かったため、プレゼンは決して満足のいく出来ではなかった。他の人と比べるとまだまだ圧倒的な差を感じた。しかし、先生に「構成が素晴らしい」と褒めていただいた。私が3 週間必死でやったことは英語力の向上につながっていたのだ。とてもうれしかった。

さて、授業を通して感じたのは、英語力とは必ずしも日常会話のためだけの力ではないということだ。日常会話では、ちゃんとした英語が話せなくてもなんとなく通じ合ってしまうところがある。それが、スピーチなどでは通用しないのだ。そこで、真の「英語力」が発揮される。今回、私にはその英語力が足りなかった。しかし、悔しい思いをばねにして必死になれたおかげで、今ではどのようにしてその英語力を培えばいいかを知っている。

今後の大学生活で今回のように英語漬けの生活を送る機会はあまりないだろう。だからこそ、今の気持ちを忘れず、自分から機会を作り続けたい。そして、次にスピーチやプレゼンをするときには、誰かに何かを気づいてもらえるようなものをしてい。私が真の「英語力」に気づいたように。



## 2015 年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

増田 里穂 工学部社会システム土木系学科 (2015 年度入学)

初めての海外での語学研修ということで、出発前は期待と不安が入り混じったような気持ちでした。特に英語、体調、食事のことなどです。実際到着してから1週間はカナダでの生活になれるのに必死であり楽しむことはできませんでした。カナダの気候は思ったより涼しく、時に寒いと感じるくらいでとても乾燥していたし、なによりこの研修に参加している香港や中国の人々が英語をスラスラしゃべっている様子を見て参ってしまったからです。しかし2週目に入ってクラスメイトやルームメイトとも話すようになってからは、毎日がとても楽しく感じました。

このプログラムの授業は厳しくもとてもためになるものでした。特に印象に残っているのはプレゼンテーションの授業です。15分間自分で決めたテーマでプレゼンテーションをするというのが課題でした。もちろんすべて英語ですが、香港や中国、トルコなどから来た生徒の人が皆、堂々と原稿に目もくれずに発表している様子を見て、自分ももっと英語を頑張らないといけないとすごく思えました。いい意味ですごくショックを受けました。この3週間の授業が私の英語学習の甘さを気づかせてくれました。

アクティビティでの思い出もとても素晴らしいものでしたが、ルームメイトと夜遅くまでおしゃべりをしたり映画を見たり、クラスメイトと受けた授業のほうが私にとっては貴重な思い出だったかもしれません。最初はそんなにたくさんのお話を話せる程自分に余裕が持てませんでしたが、日がたつにつれたくさん話が出来ると、ずっとこのままカナダにいたいと思えるほどになりました。お互いの家族のこと、専攻のこと、観光地や食のこと、日常会話など、すべてが新鮮でした。

英語を習得するのに1か月弱という期間はとても短く、何より授業を頑張ってきたみんな、仲良くなった友達と離れなければならないのはとてもつらく、別れの時はむなしい気持ちでいっぱいでした。けれどこの研修で得たもの、学んだことを糧にこれからの英語学習、将来につなげていこうと思います。そして次に今回出会った友達と話すときにはもっと会話できるようにになりたいです。

最後にこのような素晴らしい研修に携わり、サポートして下さったすべての方々に本当に感謝します。この夏の経験は絶対に無駄にしません。



大川 楓貴 医学部保健学科 (2014 年度入学)

私が参加させていただいたプログラムには英語の授業だけではなく、放課後のアクティビティが含まれていました。アクティビティでは、ナイアガラの滝をはじめとした、様々なカナダの観光地を訪れることができました。クラスメイトは様々な国から来ていましたが、英語を流暢に話すことができる人が大半で初めて授業を受けた時は相手の言っていることを聞き取ることがとても大変でした。しかし、時間が経つにつれてだんだんと英語が聞き取れるようになり、また、自分の意見を伝えられるようになりました。エッセイを書くこともあり、リスニング能力だけではなくライティング能力も向上させることができました。そしてなにより私が向上させることができたと感じているのは積極性です。授業で行ったディベートやプレゼンテーションのおかげで積極的に授業中に発言ができるようになりました。

今回のカナダ英語研修は、私にとって初めての海外でした。日常生活で英語を使わなければならない環境で過ごすことで間違いなく、英語力を向上させることができました。それだけではなく、食べ物や気候、その全てが私にとって初めての経験でした。カナダは本当に緑豊かで、今回の研修に含まれていたアクティビティでは何度も、カナダの大自然に触れることができました。大学内にはグースやリスがいて、自然の豊さに驚かされました。また、様々な国の友達を作ることができました。考え方や積極性の違いなど異なる部分も沢山ありましたが、異文化に触れたことで私の視野は広がったような気がします。

英語研修での経験を活かして、現状に満足せずにさらに英語能力を向上させていきたいです。TOEICなどを積極的に受験し、連続的に英語を勉強するようにしたいです。研修では様々な国の人々と交流することができ、積極性やコミュニケーション能力を身につけることができたので、これからは臆することなく自分の意見に自信をもって発言したいです。また、大学の講義でも受動的に講義を受けるのではなく、能動的に、積極的に講義を受けたいです。



渡辺 大修 地域学部地域文化学科 (2014 年度入学)

この語学研修を通して私は良い経験をさせてもらったと思う。

まず、準備の時点で飛行機の手配から向こうの大学との手配をすべて行ってもらっていたため私自身は決められた書類に目を通し保険契約、プレイスメントテストをするだけで簡単に海外に出発することができた。また、私にとってこの語学研修が初めての海外経験であり、また遠いカナダということで不安や緊張に駆られていたが、引率の大山さんを含む一緒に行った鳥取大学のメンバーに支えられ楽しくカナダまで行くことができた。

現地に着いた後も、日本ではついだらだらしてしまうだるさでもなかなかない経験だからということで到着した翌日には朝学校外を散策しに行くなど活発的に活動することができた。また学校では平日はかなり授業漬けだった。さらに一コマが鳥取大学と違い 150 分ということでかなり疲れてしまうが、途中のブレイクや会話形式の授業が多く長い時間でも集中して英語を学ぶことができた。それに加え英語の発音、プレゼンテーション、文法など英語と言っても様々な授業があったため飽きることなく授業に参加することができた。一方休日は学校のバスに乗りナイアガラの滝や CN タワー、カナダワンダーランドなど、いろいろな場所に行くことができた。しかもただ観光をするだけでなくお土産屋さんで店員さんと会話する時には授業で習った会話を試してみるということもできたため、休日でも英語を学ぶことができた。

しかし、授業自体のレベルが自分にとって高く、授業のスピードについていくのが精いっぱいであり自分から積極的に発言することができなかった。またついつい友達と外にでかけて課題が終わらず徹夜するはめになったことが多々あったのでこれらは自分が改善すべき点だと感じた。

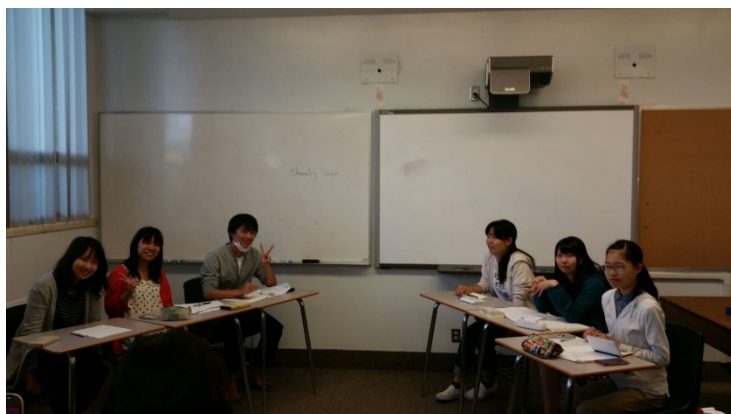
この研修を経て日本で以前学んでいたよりも英語の重要性や楽しさが分かったため、英語学習に対して能動的に活動できるようになった。このモチベーションを維持するとともに今後さらに別の語学研修プログラムに参加し、自身の英語力を磨いていきたいと考えている。



## 2015 年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

木下 遥 地域学部地域教育学科 (2014 年度入学)

今回、この夏期カナダ英語研修に参加してみて感じた自分自身の大きな変化としては、以前よりも積極的に英語でのコミュニケーションを図ろうとしていたことが挙げられると思います。日本にいるときは、英語を使ってコミュニケーションを行うことは気恥ずかしく、必要最低限でしかしてこなかったように思うのですが、この研修を通して、ルームメイトやクラスメイトと授業以外においても、趣味の話や普段の生活の話などをするために積極的に話しかける姿勢が自然と身についたと思います。また、この研修を通して、自分自身の異文化への見方や考え方が変化したようにも思っています。今までは日本の文化や慣習を中心に考えて、異文化を批判的に見ていたのですが、異なる文化圏からきた人々と1か月間ともに生活していき、彼らの文化を身近に感じ、直に触れることで、お互いの文化や慣習を理解し合ったり、受け入れ合おうとしたりする姿勢の重要性を学びました。さらに、研修先の大学での生活はとても快適で、気候も比較的日本と似ていたので過ごしやすかったし、生活必需品なども大学の敷地内で買うことができたので困ることがありませんでした。大学の敷地内には、大きな図書館や自習スペースなどがあり学習環境が充実していたし、芝生や広場などもあり気分転換も十分にできる環境が整っていました。今回の研修で、やはり英語の環境に身を置くことが大切だと感じたので、今後はより長期にわたって英語圏の国で生活することにチャレンジしていきたいと思っています。そのためにも、継続的な英語の学習は欠かせないので、カナダ研修中に授業で教わった学習内容や方法(発音の細かな違いを意識してみたり、関係代名詞を適切に使い分けたり、など)を生かした勉強を続けていきたいと思っています。さらに、実際に英語を会話の中で使用することにこそ意味があると思うので、鳥取大学にいられている留学生の方々や知り合いの外国の方々などともっと積極的に英語でコミュニケーションをとる機会を設け、実践していきたいと思っています。





木内 美月 工学部物質工学科 (2014年度入学)

私は今回が初めての海外渡航だったので他国の文化にふれあい、感じる事が沢山ありました。そして沢山の自分への反省点や改善したい点を見つけることが出来ました。

この研修ではアクティビティが充実しており、平日も休日もカナダでしかできないことが出来ました。様々な場所に連れて行ってもらい、中でもトロントとナイアガラの滝は日本では決して見る事が出来ないような景色を見られたことは、特に印象強く残っています。そしてアクティビティによって他国の方と触れ合えました。ルームメイトが他国の方であったので、部屋の中でも語学を学べる環境にあり、またカフェテリアでも様々な言語が飛び交う国際的な空間だったので、通常の会話からも実践的な語学を学ぶことができたのはよかったです。しかし、その会話の中で自分の思っていることが頭に浮かんでもなかなか英語に出来なかつたり、簡単な英語表現が出てこなかつたり、単語が出てこなかつたりと自分の英語力の乏しさを感じる事が多々ありました。

また、授業では積極的に英語で話すことを求められ、与えられた話題について英語で話し合うことはとても楽しかったです。また、自由なトピックでプレゼンテーションをするというのがあり、公の場でつかう英語の表現について考え、人前で話すという事を経験することが出来ました。

今回の短期留学により、日本とは全く違う世界を体感して、もっと他国の語学、文化を学びたいと思うようになりました。研修の初めは、英語で話すということに緊張もしましたが、徐々に慣れると英語をつかうということがとても楽しかったです。もし、また留学するチャンスを得ることが出来たら、今回見つけた自分の改善したい点を見直し、より高いレベルで多くを吸収できるようにしたいです。そして、英語を手段として用いて、自分の研究したい分野の勉強が出来るほどに語学のレベルを上げたいです。



佛生 光 工学部機械工学科 (2014 年度入学)

私はこの研修で、初めて海外に行きました。留学に対して、たくさんの不安がありました。私は英語の能力を心配していました。英語が得意な人でも、「ネイティブ英語が聞き取れるかな…」や「言いたいことが伝えられるか」など、言っていて、さらに不安になりました。カナダに着いて、ウォータールー大学の方が迎えに来られて歓迎してくれました。でも、話すスピードが速くて半分も聞き取れなかったです。今までしてきたリスニングや TOEIC などとは比べものにならないくらい難しかったです。頭の中で英語から日本語に翻訳している間に、もう次々としゃべっていて、とにかく必死に頑張りました。ルームメイトのロシア人もかなり速かったです。授業内容は鳥取大学でしている英語の授業と似ていました。でも、カナダの授業では発表や前に出て説明など、日本の授業では経験したことないようなこともしました。それはとてもためになりました。日本でも人見知りで、説明下手でしたが、外国人に伝えようと試行錯誤して、言いたいことをより簡単な表現にして、自分の英語の能力でも話せるようにする工夫をしました。そのおかげで外国人とも少しずつコミュニケーションが取れるようになりました。人見知りより違う国の人と話したいと思うようになりました。これは私にとってとてもいい成長になりました。そして、日本人以外とあまり関わってこなかったので、海外の人との交流はいい経験になりました。また、毎日あるアクティビティもとても楽しかったです。トロント、ワンダーランド（遊園地）やナイアガラフォールズなどに行きました。海外の観光をできたことはいい思い出になりました。

この研修に参加して、人に伝える・聞き取る努力や工夫を身に着けたことは、自分自身にとってかなりの成長だと思っています。一週間がたてば、なんとなく相手の伝えたいことがわかるようになりました。そして、英語でのプレゼンテーションはとてもいい練習になりました。また、人見知りが少しましになったことが個人的によかったことです。



米村 友恵 工学部物質工学科 (2014年度入学)

カナダに行って一番感じたことは海外でも意外となんとかなる、ということです。特にそれを感じたのは街へ出かけたときでした。最初は遠くに出かけるのも不安で大学の近くを散策するだけでした。しかし、周りの人にバスの乗り方を聞いたり、運転手さんに行き先を聞いたりし、後半は自分達で行きたい場所を調べて、バスに乗っていけるようになりました。最終日に、自分達だけでバスに乗って初めての街へ行けたときは感動しました。また、街に出かけて英語を使うこともいい経験になりました。大学の先生達は留学生の英語に慣れていて、発音を直して下さったりしました。しかし、現地の人と話すときは自分の発音で通じるのか、使っている文法で理解してもらえるのか不安でした。なかなか思っていることが通じない場面もありましたが、思い切って話してみると、思っていたよりも自分の英語が通じて自信に繋がりました。

今回留学をした目的は、日本では感じることのできない文化の違いを知り、理解するということでした。寮でいろいろな国の人たちと生活することで、食や思想、時間間隔の違いを感じることができました。また、授業ではプレゼンテーションをしたり、国際問題について話し合ったりしました。環境問題や肥満といったトピックの中でも、注目している点が違っていることがあって驚きました。その国の文化や、気候、思想によってこんなに違うことがあるのかと勉強になりました。

研修に参加する前は、外国は遠くにあって海外に行くのは特別なことだと思っていました。しかし、カナダで様々な体験をしたり、多くの海外の人と交流したりしたことで海外をより身近に感じる事ができました。それと同時に英語が実生活で使えることの重要さと、自分の英語能力の未熟さも感じました。また、長時間のフライトや不慣れな環境でも適応できるという自分自身の新たな発見もできました。今後は、今回の経験を自信に繋げ、英語の勉強を継続しつつ、海外のこと、日本のことを学んでいきたいです。そして、機会があれば他の国にも行って様々な文化を経験してみたいです。



## 夏期マレーシアマラヤ大学英語研修

国・地域：マレーシア

研修機関：マラヤ大学

参加者数：13 名

期間：2015 年 8 月 31 日（月）～9 月 24 日（木）

内容：マレーシア・クアラルンプールにあるマラヤ大学（※マラヤ大学は、マレーシアにおける最高学府として最も長い歴史を有する国立大学）人文・社会科学学部が提供する 3 週間の英語研修プログラム（Summer Enrichment Programme）に参加し、英語の実践的な能力を磨きます。また、文化体験の授業や小旅行もあり、マレーシアの歴史や文化に触れることができます。そして、マラヤ大学の学生がバディとして、参加者 1 人 1 人に付きますので、学生同士の交流も図れます。



浦田 優 工学部電気電子工学科 (2014 年度入学)

私は8月31日から9月24日までマレーシアのマラヤ大学で英語研修に行きました。純粹に海外に行ってみたい、英語で会話してみたいと思って大学の夏休みを利用できるこの研修に参加しました。私は特に英語が得意というわけでもありませんがサークルで海外の人と関わることもあり、話をするうちに自分もこの人たちみたいに国外に出て違う国の人と話してみたいなと思い、アジアでも特に多くの人種が集まるマレーシアを選びました。イスラム教を主とするマレーシアは日本と生活様式や考え方が違い、トイレの仕組みやお祈りの時間など最初は事前学習で知っては知っていましたが目の前で見ると驚くことが幾度かありました。ですが毎日一緒に大学に通ったり、食事を共に食べたり、しゃべったりすることでこの人たちも自分たちと一緒にの大学生でなにかかわらないのだと思い、ニュースなどで宗教間で対立している報道が信じられなく思いました。この研修、もしくは海外渡航で自分の話したことない人とのコミュニケーションが自分をより大きくすると思いました。私は研修でバディや現地の店員、一緒に行った日本の学生とたくさんの会話をしました。そこで現地の人とはどれだけ自分のしたいこと、伝えたいことを知っている英語で話せるか、どうやって聞いたらいいかなどその場その場でコミュニケーション力が少しついたと思います。またこれから伸ばしていきたいです。

また海外に行くことに不安もたくさんありました。事前学習や危ないことや場所をたくさん調べてから行ったので、渡航前は事故に巻き込まれないかや体調は崩さないかなど考えていましたが、実際行くことで自分の中でこういうことをすればよいなど考えられるようになりゆとりができました。

もっとコミュニケーションをしたい、英語でしゃべりたい、海外への不安がなくなった、これらの要素からまた研修に行きたいと思いました。またこれからも英語をつづけて学習したいと思いました。



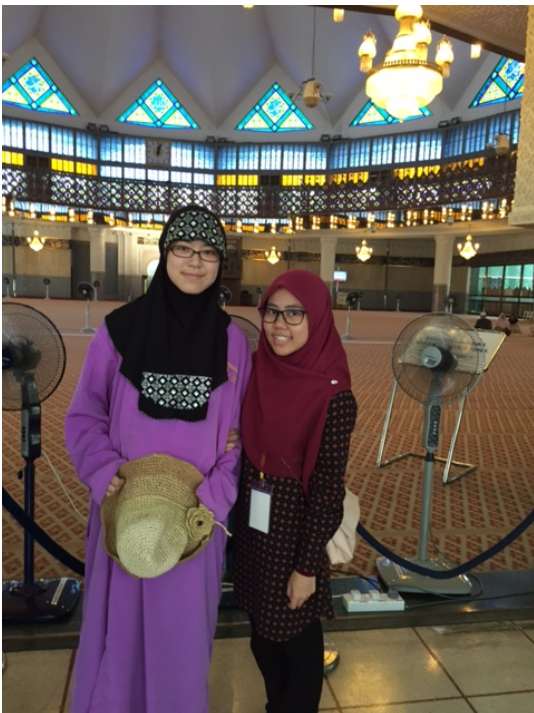
岡村 華世 医学部生命科学科 (2015 年度入学)

このプログラムに参加しようと思ったきっかけは、日本では意識することのない宗教（特にイスラム教）についてマレーシアで学びたいと思ったからです。今年の1月頃、イスラム国によって日本人が殺害されてから私はより強くイスラム教に興味を持ちました。それ以前にもイスラム系の過激派によるテロをニュースで目にしていたため、なんとなく「イスラム教＝危険?」というイメージを持っていましたが、なんとなくのイメージでイスラム教やそれを信じる人々を差別したくないという思いから、イスラム教について学ぼうと思ったのです。

実際にこのプログラムに参加し、イスラム教徒のバディと生活するようになってから、イスラム教やイスラム教徒の考え方、イスラム教が根付いた生活、そして多民族国家であるマレーシアでどのように他の宗教を信じる民族と共存しているかなどについて、すべてではないですが多くのことが学べました。

マレーシアで生活するうえで驚いたことが、日常生活がイスラム教を中心に考えられていることです。例えば、スーパーで売られているものはすべてがハラール食品です。豚肉やアルコール類はまとめてノンハラール食品コーナーに売られています。ショッピングモールや駅にはお祈りをするための特別な部屋があり、イスラム教徒はどこに出かけていても時間になるとお祈りをするすることができます。これらは日本ではほとんど見ることはありません。つまり、日本はイスラム教徒にとって過ごしにくい国だといえます。この先、日本には多くのイスラム教徒が訪れることになると思います。その時に彼らが過ごしやすい国をつくっていきたいと思うようになりました。

今回、マレーシアに研修に行き、イスラム教を生で感じることで、イスラム教についての理解が進んだだけでなく、イスラム教徒に対する心配りがこれから先重要になると思いました。



景山 和仁 工学部知能情報工学科 (2013 年度入学)

英語を学習する目的でこの語学研修には参加したのですが、英語以外にも学習する点は多くありました。

まずは、英語についてですが、授業は基本的に教室で文法や、ライティング、発音を学ぶクラスがありました。それらでは、文法などは中学や高校で習ったから簡単だろうと考えていましたが、意外と忘れていたり、なぜここはこの答えになるのかについて先生に質問されたときに、英語で答えをうまく説明できないなどということがありました。またライティングの授業では日本でなかなかする機会がない英語でのプレゼンテーションがありました。少人数の人前で発表することは日本でもやっていたのでそこまで苦ではなかったのですが、「英語で」となれば急に何か僕の中で単にプレゼンするとうことから英語でプレゼンするというハードルの高さに気づかされました。授業に関して僕が感じた点は、「日本語で」なら簡単なのですが、やはり普段使っていない言語を使うだけでこれほどの違いがあるのかと気づかされたことです。また、授業中でも現地の大学生が分からない点を英語でアシストしてくれるのですが、これがまた難しいのです。僕たちが大学受験までに必要とされてきた英単語はもちろん覚えています(少し忘れていところもあります)、今まで聞いたことが無い単語で説明されたりすることもあって円滑なコミュニケーションをとっているとはお世辞にも言えませんでした。これらの2つの問題をこれから改善するために、と考えていましたが実は日本に居てもできるということができるので帰国した今から始めるきっかけになりました。

次に英語以外に学習した点ですが、マレーシアの文化、宗教です、マレーシアにはマレー系、中国系、インド系の方がいるので、伝統的な衣装や食べ物は全く違いますがお互いに共存しています。マレーシアの多くを占めるマレー系といわれる方の多くはイスラム教なので、豚やアルコール食品を食べられないのですが、きちんとハラールマークがどの食品にもつけられていて安心して食べられるようになっていました。文化について言う一番驚いたのは、手で食べることでした。日本人にとっては箸やスプーンフォークを使って食事をすることは当たり前のことですが、伝統的な結婚式に参加させていただいたときは、食事を僕らも手で食べました。

現地では色々な体験をしたのですが、これらのことを活かして今後チャレンジしていきたい点があります。1つ目は、英語の単語や基礎的な文法をもう一度勉強すること、次に、日本の文化や歴史について英語で説明できるように勉強すること、最後に、英語を使って何か1つ海外から日本に来た人のために役立つ仕事をしたという点です。



古河 ゆり 医学部保健学科 (2015 年度入学)

マレーシアではバディ制度のおかげで1日中英語を使って過ごすという貴重な経験ができた。英語でうまくコミュニケーションがとれるのか不安だったが、バディが積極的に話しかけてくれるので、初めての海外だったが英語での会話を楽しむことができた。授業中私が自身なさげにしていると”Confident!”と言って励ましてくれた。このような経験から、英語で何かを伝えたいときは無理に文章にしようとか、文法が間違っていたらどうしよう、という心配は不要なのだと学んだ。むしろ単語だけでも身振り手振りや表情などからも伝わることも多くあった。最初はつたない英語でも何かを伝えようとする姿勢や、英語を少しでも多く会話の中で使っていくことで自然と口から出てくるようになるものなのだと感じた。バディ制度があるマレーシアの研修だからこそ英語を話す機会はいつでもあり、自分から話そうとすることで3週間だけでも多くのことが学べる。授業では高校で習ったような文法やリーディングのやり方、英語でのプレゼンテーションに挑戦するなど英語を使ってしっかりと基礎から学び直すことができた。講師の英語は聞き取りやすく、授業も少人数制でバディが隣にいてくれたこともあり、発言しやすい良い雰囲気のものだった。今回の授業で、既に習っていたけど気づけなかったようなことや、新しく学んだことも多くあり、非常に有意義な時間だったと思う。授業外でも学べることは多くあり、例えばイスラム教信者がマレーシアでは半数以上を占めるため、週末のアクティビティでは多くのモスクを見学することができた。私のバディもムスリムだったため、1日5回のお祈りを欠かさず行っている様子が見られた。ショッピングセンターにも必ずお祈り用の部屋が設けられていたこともマレーシアならではの事だった。一方でリトルインディアやバツケイブなどのヒन्दュー教文化の場所もあり、それらが対立することなくお互いの文化を尊重して共生できている様子が伝わってきた。また、マレーシアは独立して日が浅いためか、いたるところの国旗が掲げられ、国王の写真が飾られるなど愛国心の強さがうかがえた。研修に来た日本人のほとんどが現首相を特に好きではないと答えたことにも不思議そうな顔をしていた。海外にいるからこそ日本人として自分は日本国のことを大切にしていっていただろうかと日本国民としての意識を考えさせられた。





合田 富美子 工学部生物応用工学科 (2014年度入学)

私はマレーシアマラヤ大学英语研修に参加して英語の上達、コミュニケーション能力の上達、異文化に触れ理解することができたと思います。

私は3週間も海外で生活したことがなかったので、マレーシアについてバディに会うまでは本当に不安でいっぱいでした。しかし、マラヤ大学のバディ達は皆フレンドリーでとても優しい人達ばかりで、マレーシアでの生活がすごく楽しみになりました。もし、私がひとりでいたりすると、私のバディでなくてもマラヤ大学の生徒達は「Are you ok?」と気にかけてくれました。また、マラヤ大学の生徒達は進んで話しかけてくれたので、日本人は内気な性格だなあっと改めて実感しました。バディ達はいろいろなことをしてくれて、さっき会ったばかりの人とは思えず、なんでこんなに優しくできるのだろうと思うこともありました。私のバディはムスリムです。私は今までムスリムの人と関わったことはなく、ムスリムの人々について教科書で少し習っただけでした。知っていることといえば、豚肉が食べられない、お酒が飲めない、断食がある、女性は肌を隠すということぐらいでした。ムスリムには禁止事項がとても多いというイメージがありましたが、彼らにとってそれが普通であり、少し違うかもしれませんが私が習慣的に青汁を飲むようにしているような感覚なのかあと感じました。このように異文化について考える機会が増えるにつれてもっとイスラム教について知りたいと思う気持ちが増え、バディによく質問するようになりました。

英語の授業では、もちろん先生は英語で説明します。最初はなかなか理解できませんでしたが、だんだんとわかるようになり授業が楽しくなっていました。先生の話していることが理解できると嬉しくて、英語に対する自信にもなりました。日本の大学では単位修得にあたりテストやレポート提出が多いですが、マラヤ大学ではプレゼンテーションが多く、普段からプレゼンテーションを行う機会が多いようでした。私もこの研修で英語でのプレゼンを行う貴重な体験をしました。

私がこの研修で英語を使って生活してみても思ったことは、単語の重要さです。伝えたいことがあっても単語がわからなければなにも伝えられませんでした。これから日々の英単語の学習を始めていきたいと思います。



佐藤 大地 工学部物質工学科 (2013 年度入学)

海外には興味はあったものの、3年生になるまで海外にいったりすることはしませんでした。最初このプログラムを選んだ動機は大学生活で何か印象に残ることや、これから生かしていけることをしたいと思って応募しました。最初はそういった軽い気持ちだったのですが、マレーシアから帰ってきてこのつながりを無駄にはいけないし、そのためにも英語を絶やさない生活を心がけていきたいと思いました。マレーシアの英語研修で一番良かったことは何といってもバディ制度です。この制度は三週間という短い期間のなかで最も効率よく英語に触れることができましたと思います。普段の生活のなかで英語を話さなくちゃいけない環境の中、私は最初全くコミュニケーションをとれずずっとバディが話すことに受け答えする感じだったのですが日をおごとに生活にもなれ、ジョークをはなせるほど会話ができるようになりました。それは、自分にとって大きな自信になりましたし、継続していきたいと思いました。マレーシアの授業はレベル別にクラスが分かれ、英語が初心者の人でも理解しやすい内容でした。この授業を通して思ったことはまだまだ基礎が足りていないということでした。特に感じたのが文法と発音です。高校のときにある程度学んだ知識があったので文法の理解はしやすかったのですが、実際使ってみるとなると頭の中が混同してしまってもううまく伝えられないということが多々ありました。あとは、発音が悪くて伝わらない、ネイティブの発音に慣れていなくて聞き取りづらいということもありました。ネイティブの発音に慣れるのは容易ではないけど、自分の発音が悪いと会話が成り立たないので恥ずかしい思いをしたと同時にもどかしい気持ちもありました。そんな中でちゃんとした英語の発音を学び、いろんな時系列で英語を使う練習をすることによって私の英語力が向上しました。それで自信が付いたのか授業で発言することに恥ずかしい気持ちがなくなり若干引っ込み思案が解消されたように思いました。このマレーシアの研修は帰ってきて終わりではなくこれからが始まりだと思いました。いかに学んだことを頭から離れないようにするか、マレーシアバディとずっと関係を保っていけるかがとても大事だと思いました。一度きりの出会いで終わらせるかは自分の今後にかかっているなのでこの火種を絶やさないようにしていきたいと強く感じました。



三浦 拓海 工学部機械物理系学科 (2015 年度入学)

外国に行ってみたい。私が今回、マレーシアマラヤ大学英語研修に参加したのはそれだけの理由である。英語にはそれほど自信を持っていたわけでもなく、治安や衛生に関わる不安も、もちろんあった。だが、私の「外国」への好奇心はそれをはるかに上回っていたのである。何故、マレーシアを選んだのかといえば、コストの低さと、より日本から遠い文化圏に行きたいという欲求の兼ね合いであった。こういった次第で、私はマレーシアの地を踏んだのである。

斯くして、かねてから望んでいた通りに「外国」というものに接触することに成功したのだが、私にとって、言語が理解できないことによるストレスは、予想以上の物だった。マレーシアのバディ達は流ちょうな英語を話すのだが、日本においてさえ口下手の部類に入る私が、当初、簡単な受け答え以上の「会話」を成り立たせるのは至難の業だったのである。だが、数日も経つとそれも苦ではなくなった。慣れ、というのが一番大きい。マレーシアのバディ達は、とにかくテンションが高い。そしてノリの軽い会話の常として、難しい単語は登場しないため、慣れると思いのほか聞き取れたのである。そうして会話に対するストレスが解消されると、ほかの沢山のことに気が回るようになった。マレーシアの料理や宗教、歴史を知ることが出来たばかりでなく、床屋へ行ったり映画を見たりと、研修プログラム外でもかなりディープな向こうの文化を知ることが出来たと思う。そしていつしか会話にも慣れて、バディ達との会話を楽しめるようになった。このとき私が気付いたのは、いつかするだろう英会話のためにあらかじめ頑張る勉強よりも、まず伝えたい事ありきで、それを相手に分かってもらうために後から知識を増やしていく、という勉強の方が、とても自然で腑に落ちるということだった。ただ一つ反省する点があるとすれば、私は自分の考えていることや、他愛ない冗談を十分に英語で表現することが出来なかった。だから、私はまた外国に行って、そして今度はその国の人たちと笑って話ができるように英語力を磨きたいのである。



## 2015 年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

糸井 理彩 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

この夏期マレーシアマラヤ大学英語研修プログラムでは、三週間大学で英語の授業を受け英語のスキルアップを図るだけでなく、寮で現地のバディと共同生活を送りまた休日はマレーシアを観光したりする中での異文化理解も目的としたプログラムでした。

授業は発音・文法・ライティング・リーディングなどの英語の力を身につけるための授業だけでなく、Debate Competition や Group presentation など英語の力を応用させる機会もありとても充実した有意義なものでした。

特に Debate Competition ではクラスのメンバー全員が出場できない中、突然自分が代表者に選ばれてびっくりしたけれど、限られた時間の中でグループのメンバーと英語で意見交換をしながら自分の主張をまとめていく作業は刺激的で、また新しい知識を増やすことにもなり、とてもよい経験になりました。

バディにつれられて ترامやモノレールに乗ったりショッピングモールで買い物をしたり、といった現地の人にとっては当たり前の日常生活さえも私には新しく、異文化を知ることのおもしろさに気付きました。

また、交流を深めていく中で、その地域の人々の生活の基盤となっている文化をきちんと理解するためには、その文化をもつ人々の価値観をしっかりと理解する必要があると感じました。

さらにマレーシアでは日本とは異なり信仰心の強い人が多く、宗教に興味を持ったり、また「いただきます」「ごちそうさま」といった感謝の意を示す日本での日常生活における何気ない習慣を振り返る良いきっかけにもなりました。

今回の研修で、少し海外で長期滞在してみることに對して自信が持てるようになったように感じます。また、交友関係の幅が広がったことで自分とはことなる考え方をどんどん吸収できるようになりました。

また、今回の研修で自分はもっと世界・日本・宗教の知識が足りなさすぎると痛感し、もっといろいろなことについて体系的に勉強していく必要があるように感じました。

西村 ひかる 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

わたしにとってこの研修が初の海外渡航だったので期待とともに不安も大きかったけど、今ではマレーシアに行くことができ本当に良かったなと思っています。この研修に参加して感じた自分自身の変化としては、いろいろな面の視野が広がったということです。宗教や、文化、現地で受けたショックに対してもそうだし景色とかも日本では体験できないようなことに直に触れることで得られたものは大きかったと思います。何が得られたというのを明確に示すのは難しいけど、すべて経験として身につけているのだと思います。見るもの食べるものにいちいち感動を覚えるし、それを感じる自分が自分で嬉しくなってきました。英語でコミュニケーションをとったり、授業をうけたり、プレゼンテーションを作ったりエッセイを考えたり、それが同じ日にちに重なったりと大変ではあったけど楽しかったです。今後も続けていきたいことは何といても英語の勉強かなと思います。特にスピーキングを頑張りたいと思います。まだまだ自分の言いたいことを英語でどう表現すればいいのか迷うので言い換えを駆使してでもさらっと言えるところまで持っていきたいです。日本にいるとなかなか英語で会話するという機会がなくどうしようか悩んでいる所ではありますがとりあえずバディに教えてもらった英語の歌の動画を字幕付きで見と一緒に歌うという方法を試してみようと思っています。また、最高のバディと出会うことができたので SNS を駆使してバディとの交流も続けていきたいなと思っています。今後チャレンジしていきたいことは他のプログラムにも参加することです。その国々で体験できることは変わってくると思うのでとりあえずいろんな国に行ってみたいです。また、人前でも堂々としていられる人になりたいです。私は恥ずかしがりやで人前に出ると緊張してしまい声が小さくなったりするけど、現地のバディは人前でもシャキシャキ喋っていてしかも英語で冗談も交えつつ発表していて自分もこうなりたいと強く思いました。この研修は24日間だったけど自分に大きな影響を与えてくれたと思っています。



中川 貴裕 工学部社会開発システム工学科 (2013 年度入学)

今回、私はこのマレーシアマラヤ大学英語研修に参加して大きく 2 つのことを学びました。

まず、何よりも大きな学びとなったことは、自分の知らない世界を体験することの大切さです。今まで一度も日本から出たことがなかった自分にとって、様々な文化を持つマレーシアという国に行くことができた事は、本当に良い刺激になったと思います。自分は、



マレーシアで様々な文化に触れて、体験し、様々な光景を目にしたことで今までの自分の視野の狭さに気づかされました。今後、自分の視野を広げ、さらに大きな人間になるためにも、他の国へ行って多くの文化に触れてみたいという気持ちが芽生えました。また、他の国へ行き、その国の方とコミュニケーションを取るために必要不可欠なツールの英語を、もっと勉強して、楽しく会話ができるようになりたいという気持ちも強くなりました。

次に、本当の自分の英語能力に気づかされたことです。今まで長い間英語を勉強してきましたが、実践的に英語を使う機会が無く、自分の英語能力を測るツールとしては TOEIC しかありませんでした。しかし、このプログラムに参加し、日常会話で英語しか通じない環境に身をおいたことで、実際の自分の英語能力のレベルに気づかされました。ヒヤリングには少しだけ自信があったため、相手の伝えたいことを聞き取ることはできましたが、自分の意見を文にして相手に伝えようとする際に、自分のボキャブラリーの少なさのために、すぐに受け答えすることができませんでした。その時の悔しさを、今でも忘れることはできません。私は、その日から携帯電話でアプリをダウンロードし、毎日自分のボキャブラリーを増やしていきました。また、会話の中でわからない単語やイディオムはすぐに調べるようにしました。この効果はすぐには出ませんでした。プログラムの最後の週では、スラスラと会話ができるようになり、マレーシアのバディと楽しく会話ができるようになりました。

このように、今回、この英語研修プログラムに参加できたことは、私の人生においてとても大きな影響を与えたといっても過言ではないと思います。しかし、欲を言えば、もう少し早くこのような英語研修プログラムに参加しておけばよかったと心から思います。現在学部 3 年の自分にとって、大学生としての時間は残り少ないです。しかし、これからもできる限りこのような英語プログラムに参加していこうと思いました。



長島 大地 工学部電気電子工学科 (2013 年度入学)

本プログラムで私が一番魅力的だと感じたのはバディ制度です。初めてバディと出会ったのは空港から大学まで行くバスの中です。初めは何を話していいのかもわからず、自分の自己紹介も上手く出来ませんでした。ですが、バディがとても積極的に話しかけてくれたのでだんだんと会話が出来ようになりました。バディと常に一緒に行動していたので、常に英語を喋らないといけない環境でした。寮の部屋も共同でしようするので寝るのもご飯を食べるのも一緒です。正直、日本といた頃とは環境が違い、バディと一緒に住んでいるので常に英語を話さないといけない状況だったのでストレスを感じることもありました。ですが、過ごしていくうちにお互いのことをよく知ることによって仲も打ち解けてきました。冗談を言い合える友達もたくさん出来ましたし、みんなこれからも関わっていきたい友達ばかりでした。私が英語でもっと会話出来ていたらもっと仲良くなっていたはずですが、今バディとは違う国で離れていますが、フェイスブックなどで連絡を取り合っているため、この繋がりは大切にしたいと考えています。それと同時に次あった時はもっと英語が喋れるように日本にいても英語に触れていくことはするつもりです。この研修に参加するまではバディの存在が自分の中でここまで大きくなるとは思っていませんでした。もちろん英語の勉強が目的で参加しましたが、今ではそれ以上に大切なものを得た気がします。今回の研修の中にホームステイがありました。僕らが宿泊している寮とは違いホームステイ先は田舎でマレーシアの伝統的な造りの家でした。ホームステイ先に行く前には古典的な米作業や凧揚げ、バティックという塗り絵、魚のつかみ取りといった自然を活用した遊びが体験できました。何年ぶりかと思うぐらい久々に凧揚げをして子供のようにはしゃいだり、魚のつかみ取りではみんなで泥んこになったり、楽しくて貴重な体験ばかりでした。ホームステイ先の家族はとても親切な方ばかりで快適に過ごすことができました。家にはクーラーがありませんでしたが、マレーシアの気候に合わせて家の造りも風がよく通るように設計されているので、とても涼しかったです。イスラム教は決まりごとが多く日本の文化と大きく違うため困惑することもありました。一日五回のお祈りの時間や男性は女性に触れてはいけないこと、食事のマナーなど多くの事を学びました。マレーシアの事前研修で文化については調べていましたが、体験しないと詳しくはわからないことや実際に現地の人はどう感じているのかなど、聞くことが出来ました。それによって初めてマレーシアの文化に興味を持つことができました。



## 2015年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

苗村 朱莉 農学部生物資源環境学科 (2013年度入学)

今回、マレーシアでの研修に参加して確実に成長できたと思います。そして参加して良かったと思います。一番良かったと思うことはバディがいてくれたことです。このプログラムの特徴である異文化理解と英語漬けが本当に体感できました。マレーシアとローカルバディたちは今の私にとってすごく新鮮で刺激的でした。まずローカルバディたちが何事にも積極的だと思いました。それまで日本で私は自分が積極的ではないと分かっていたのですがそれが悪いことだとも積極的になろうとも思っていませんでした。ローカルバディたちと出会って積極的な彼女たちがうらやましく思い自分も近づきたいと思うようになりました。授業では恐れずに発言や質問をするし友達や初めて会った私たちにもたくさん話しかけてくれました。積極的ではないことが悪いことではないと今でも思います。しかし、積極的であるほうが自分にとってより良いと思うようになりました。それにローカルバディたちと一緒にいるとマレーシアに来る前の私より積極的な私に自然となっていることに気づきました。日本に帰ってきてこれからはもっといい自分になれるよう意識して努力していきたいです。



あと、私にとって今回初めての海外でした。見るもの聞くもの感じるものすべてが初めてで海外を実感しました。マレーシアはイスラム教やヒンドゥー教を信仰している人が多いというのも日本ではあまりない環境でした。また、日本で調べたことと若干違うところもありました。現地では同じ宗教で同じ大学生でも信仰度がいろいろであることが私にと



って驚きでした。そしてそれをお互いに認め合っていました。実際に行って経験しないとわからないのだと改めて思いました。多文化を認め合うことは多文化でない日本においてはなかなか体験できないことだったと思います。相手を知って自分も知ってもらうことが大事だと思いました。



片岡 寛晶 工学部機械物理系学科 (2015 年度入学)

私は英語が苦手でした。しかしながら海外に行くというのに憧れていましたし、友達に誘われたのをいい機会だと考えたのでこの海外英語研修に参加しました。この研修では現地の方がつきっきりでお世話してくれるバディ制度がありました。説明会を聞いているとこのバディ制度がいいというのがうりでした。でも行く前になって何を話



したらいいのかわからないし、ちゃんと伝わるのか、まだ自分では太刀打ちできないのではないかなど不安ばかりいました。そして行ってみると確かに自分の語彙力ではまだまだ伝わらないようなこともありました。バディさんはみんなちゃんとこちらが言うことについて耳を傾けてくれました。なので、すぐにプログラム参加者全員仲良くなりました。プログラムの目的は英語研修なので英語の授業もありましたがそれ以上に外に出て観光やマレーシア独特の書き方で絵をかいたりするなどアクティビティが豊富にありとても楽しい時間を過ごしました。もちろんいつでもバディさんが一緒なのでバスでも楽しくみんなでカラオケ大会をしたり、マレーシアで人気の遊びをしながら移動してました。こうして英語でしかコミュニケーションできない状況に置かれると自分の英語能力はまだだだと実感しました。日本で受ける英語の授業では使わないような言い回しや笑いをとれる表現を教えてくださいました。それでもやはり自分の語彙や文法の無知で話が途切れたりしました。あれほどすらすらとしゃべれる人が羨ましいと思った事はないほど自分の無知が歯がゆかったです。この研修で得たことはたくさんあり、楽しい経験や異文化に触れることもでき貴重な時間を過ごしました。その時間の中でもコミュニケーションをすることで何倍も楽しくなるはず。私は英語というコミュニケーションツールを今までは苦手であるということで少し軽視していました。このことは研修に行った途端になくなり、英語は非常に重要なコミュニケーションツ



ールであると認識しました。これからは英語をしっかりと勉強しなければならないと思い、行動しなければならないと感じました。大学内の授業はもちろん今まで以上にしっかりと受けさらに自主的な勉強もしていくつもりです。ゆくゆくは英語をすらすらとしゃべれるようになりマレーシアで出会った友達と再会したいです。

## 夏期台湾銘傳大学中国語研修プログラム

国・地域：台湾

研修機関：銘傳大学

参加者数：12 名

期間：2015 年 9 月 2 日（水）～9 月 22 日（火）

内容：台湾台北市に位置する銘傳大学基河キャンパスで、レベル別 2 クラスに分かれ、中国語専門講師による、中国語 4 技能（読む・書く・話す・聞く）の集中トレーニングで、中国語の実践的な能力を磨くプログラム内容となっています。中国語授業以外に、文化体験（カンフー、太極拳、書道、中国映画鑑賞）や戯曲学校、故宮博物院などの文化施設見学ツアー、TA として研修に参加する銘傳大学の学生との交流を通じて、台湾の歴史や文化に触れることができる、語学・異文化理解プログラムです。



研修開始直後、オリエンテーションに参加している学生の様子

永田 莉香子 工学部生物応用工学科 (2014 年度入学)

私は研修を通じて数多くの経験をし、多くの事を学ぶことができました。まず初めに分かったことは、日本語以外の言語が母語として使われている国に出向くということは、未知の世界に飛び込むということなのだということでした。研修前から想定していたことではあったけれど、いざ日本語は通じず、どこを見ても何と書いているのか分からない環境に身を置くと、急にとても不安になりました。はじめの1週間は、見知らぬ地・見知らぬ味・見知らぬ言語についていくことで精一杯でした。しかし、色々な文化に触れるにつれ、知らないことに対する不安が、知りたい・もっと挑戦したいと思う好奇心に変化していきました。研修前は、異文化とはどんなものなのだろうと



いう漠然とした疑問しか持っていなかったけれど、研修に参加し実際に身を置くことで、積極的に異文化を理解することの楽しさ・すばらしさを学ぶことができました。他国の文化を学ぶことで、その国の良さだけでなく自国の良さにも気が付くことができました。今後は国際交流の行事に自ら足を運んでより多くの文化を学んだり、様々な研修に参加して新たな知見を得たりしていきたいと思います。また、授業や外出先では自分の中国語や英語の能力のつたなさを再認識することができました。特に印象に残っているのが、お店で飲み物を注文した時のことです。夜市に出かけた日、中国語での注文に挑戦してみようと思い、授業で習った表現を用いて「～を1杯ください。氷はいりません。」と注文しました。しかし、出てきたのは氷入りのジュースでした。最終日にもう一度、言い方を変えてリベンジしてみました。結果は同じでした。この経験を通して、自分の中国語が相手に伝わっていないということがダイレクトに分かりとても悔しかったです。今回の研修では、自分の実力不足でこの壁を超えることができずとても悔しい思いをしたので、次回行ったときに同じ思いをしないよう、これからより一層努力を積み重ねていきたいと強く感じました。また、授業を通して毎日継続してやることの重要性を実感したので、今後は語学の時間を1日の中に設定するなどして継続的に学習していきたいと思います。今回の研修で得た新たな視点をもっと広げていくこと、台湾で出来た友達やお世話になった先生方と次回会う時まで中国語で意思疎通をできるレベルに到達しておくことを目標にこれから頑張っていきたいと思います。

宮川 紗綾 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

初めての海外研修に参加し、改めて自分の英語と中国語の知識並びに実践経験が不足していたことを痛感した。無言でも買い物が成立するコンビニでさえも、温めるのか、袋は必要かなど、今何を聞かれているのか分からず、日本人相手には理解してもらえた英語も発音が悪く、自分の要求がスムーズに伝わらないのは日常茶飯事。とりあえず何か言わなければならない状況で、なんとか周りの仲間と協力して身振り手振り、辞書を用い、相手が言っていることをその場の雰囲気から予測して対応することはできたが、文法など気にしている余裕もなければ、妥協すれば主張と全くずれた結果を得るということを、身をもって学んだ。自分の意思が満足に伝えられない、これほどまでもどかしい経験をしたのは初めてであった。中国語は1年半、英語にいたっては7年以上学習してきたはずなのに、こんなにも使いこなせないのは明らかに自分の取組が悪いからである。同年代の台湾人大学生が1年間日本語の勉強をただけで、あれほど流暢に話す姿を見ると、いよいよ自分が情けなくなった。それでも、授業を受けて2週間ほど経ったころ、少しずつ相手が何を言っているのか分かるようになり、ようやく習った会話が生きてきてからは、些細なトラブルは減ったし、テレビから流れる番組も字幕と一緒にではあるが楽しめるようになるなど、日常会話程度ならば聞き取り返答できるレベルにまで至ったことが自覚できた。

また、恵まれた環境の中に身をおくこと自体が、言語を習得するうえでの十分条件ではないことも知った。更に、現地に行ったことだけで満足するのではなく、この機に乗じ、積極的に会話をしていくことが最も重要であり、その点、会話や発音に重点が置かれた少人数での授業は効果的であったと思う。分からないことは恥ずかしがらずに理解するまで尋ねる、疑問に思うことは書き留めて調べる。そういう当然の学習態度が今まで欠落していたことにも気が付いた。

今回の研修により、長らく目を背けていた自分の学習態度を、今はっきり自覚して、改善に努めようとしているが、何もしなければ、いずれまた元の状態に戻ることは火を見るよりも明らかである。中国語の学習に限らず、現状に満足し閉じこもっていること、また周りの目を気にして行動をためらうこと、そんな無意味なものは初めから必要なかったのだと確信させてくれたこの研修経験を忘れずに日々を過ごしていきたい。

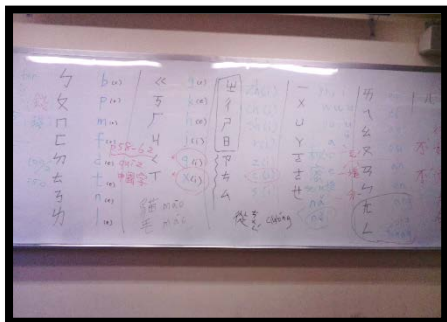


写真1. ぐわんごの授業黒板

ピンインより正確な発音を可能にする台湾の注音符号宋老師にお願いし、口の形と音声を録画させていただいた。



写真2. 教科書「實用視聽華語」

授業で配布されたプリントから教科書を特定し、台湾の誠品書店で購入した。

全4巻まであり、中身は中国語（繁体字）と英語、ぐわんごで印刷され、音声CD付。写真は、1巻のみ店頭になかったため、拙い英語で店員の方と交渉しなんとか手に入れることができた1冊。

玉櫛 奈緒子 地域学部地域政策学科 (2014 年度入学)

今回の中国語研修に参加して感じた自分自身の変化は、もっと中国語を身に着けて中国語で意志疎通がうまく図れるようになりたいと思ったことである。中国語を基礎から学んだが、最初は先生が言っていることや、中国語で話されたときに何を言っているのか全く理解できなくて悔しい思いをすることが多かった。授業を重ねるにつれ、なんとなく先生が言っていることが分かり、質問に答えることができたり、中国語で分からない時は先生が英語で説明してくれたり、授業で中国語の歌を歌ったりして、楽しい雰囲気の中で中国語を学べたのが、中国語を学ぶことにおけるモチベーションをあげることができた。

そのなかで、授業で習ったことを買い物で活かせたときは嬉しかった。買い物をするとき自分が言ったことが通じて注文が出来たり、お店の人が言ったことを少し理解できたりした時は自分の中国語が、少しだけ進歩しているのだと感じられた。

授業の後や休日は TA として銘傳大学の学生や先生に台北の色んなところに連れて行ってもらったり、日本語学科の学生と交流したりすることがあったが、TA さんや日本語学科の生徒たちは私たちと普通に会話ができ、日本人のようにうまく会話をしていて、自分も中国語を使ってこんなふうに会話が出来ようになりたいと強く思った。TA さんと会話するとき日本語か英語で会話することが多かったため、自分の中国語の練習の為に、自分から中国語を使ってもっと話してみればよかったと感じたので、大学で中国の留学生と話したりして、自分の中国語、特にスピーキングを磨いていきたいと思った。



今後チャレンジしていきたいこととしては、銘傳大学の桃園キャンパスに行ってみて、実際に私もここに留学してみたいという思いが強くなったことである。自分の中国語はまだまだ足りないが、毎日少しずつ中国語を勉強したり、中国語に触れる機会を作ったり、中国語だけでなく、英語もそうであるし、語学に限らず、色んなことに挑戦していきたいと思った。



桑原 知弘 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

研修先についてまず私が驚いたことは、向こうの人はみんな英語が話せるということである。台湾の大学では授業が英語で行われているらしく、みんな英語が話せるという。実際の授業では先生が自分たちに伝わりやすいように、英語で授業してくれていたが、自分には英語力がないので、聞き取ることができなく、聞き返してしまったり、周りの人に助けってもらったり、することが多かった。なので、まずはあいての言っていることを聞き取れるように、英語を勉強しようと思った。

この研修で自分がどういう人間かも知ることができた。向こうへ行ってから2週間くらいたつて、自分はとてもネガティブな感情に襲われた。数日このネガティブが続き、担任の先生に話したところ、励まされて泣いてしまった。周りの人に迷惑をかけて、気を遣わせてしまったことをすごく反省している。台湾から帰ってきてから友達に話したところ、海外で精神的に病んでしまう人が結構多いということを知った。自分もそのタイプであろうということを知り、また海外へ行く機会があったならば、その時はしっかり気を付けていかなければならないと思った。

改善していききたいこととして、自分は何をするにも考えすぎて、それでチャンスを失ってきたので、考えすぎず、何事もまずはとりあえずやってみようとするのを心掛けようと思った。研修先で病んでいた時も先生に「杞憂」だと言われた。何をするにしても一歩踏み出す「勇気」が必要だと思った。自分に今一番足りていないものが「勇気」だと自分は思う。

正直、研修の前後で自分が良い方向に変わることができたかどうかはわからない。多分変わることはできなかったであろうと思う。しかし、今一度自分を見直すことができ、改善点も見つかったので、この研修に参加してよかったと思う。自分を変えられるのは自分しかいないし、自分を幸せにできるのも自分しかいないと思う。自分を変えていけるように勇気を持ってこれから生活していきたいと思う。



合田 剛 工学部社会システム土木系学科 (2015 年度入学)

中国語の授業を受けることで、多少の語学力の向上があると思う。さらに、授業で得たものや実際街で現地の人々の中国語を聞くことで、発音の違いといった日本ではあまり感じることはできない自分の課題を見つけることができ、今後語学の勉強をするうえで今までとは違う意識を持つことができ、より良い勉強ができると思うので、今後の自分にとってよいきっかけになったのではないかなと思う。また、普段の生活では、日本とは違う文化ゆえ困ったことも多々あったが、それが良い刺激となり視野を広げることができ多様性を受け入れることが少しはできるようになり、今のグローバル社会を生きていくためへの大きな資源を手に入れたと思う。

文化体験や観光地に行くことで、日本ではできない体験や見られないものが見られたのをとてもよかったと思う。中国の歴史や文化を目で耳で鼻で口で肌で感じることで感動があったり、新たな興味を見出すこともでき、とても楽しくとても濃い3週間を過ごすことができた。

ただ、今回の研修で反省しないといけなこともあると思う。例えば積極性についてだ。今回の研修では銘傳大学のTAの学生さんや先生方と話す機会が多々あったにもかかわらず、自分の英語や中国語に自信がないのを言い訳にあまり自分から話すことはできなかった。今思うと、話せないなりにもっともっと話して会話の中でもっともっと学べばよかったと思う。また、事前準備が足りなく中国語をもっとしっかりと学んでから行けばより充実した研修ができたと思うし、あらかじめ台湾と日本の文化の違いを調べてから行っておけば、今回みたいに台湾人に失礼なことをすることもなかったのではないかなと思う。

これらを踏まえたうえで今回学んだことを今後の学生生活やもっと言うと社会人になってもうまく活用していきたいと思う。また、今回は台湾だったが、ぜひ違う国へも行って見て、いろいろなものをみて今よりもっと見聞を広げられたらいいと思う。



## 2015 年度夏期鳥取大学 Global Gateway Program

鋤田 千咲 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

私にとっては初めての海外渡航で、言葉や食などいろいろなものにショックをうけ、様々な経験をすることができたため、大学4年間の中で一番記憶に残る出来事になるだろうと思います。言葉のギャップが大きくて、中国語の他に英語についても思うことが多くありました。私は、話せないのでまず話せるようになることを目標に決めて参加しました。今回の研修の授業では発音をしっかり習うことができ、先生も繰り返し発音練習に付き合ってくれたので、日本で受ける授業より分かりやすかったことと、話すのは難しいし、まだ会話の内容も理解できませんが、前よりも周囲の人が発している音のはっきり聞こえるようになった気がします。台湾でインタビューの課題が出たときや電車や通りで話しかけられたときに、台湾の人と中国語だけで話すことができましたが、みんないいで人つたない中国語に長々と付き合ってもらいました。コミュニケーションをとるのに大事なことは語順とか発音も大事ですが一番に伝わるように話すことなのだろうと思いました。台湾でお世話になったボランティアの学生の人たちは中国語の他に英語も使える方が多く、中国語で何を言えばいいかわからないときは英語で話をしましたが、自分は片言の英語しか話せず、発音にも不思議な顔をされてしまって、英語は少なくとも中学校の時から授業で習っていたはずなので、英語もどれだけうまく利用できてないか、どれくらい勉強不足なのかを感じました。研修が終わって英語も中国語ももっと話せるようになって、現地の人と話スピードで会話ができるように学んでからもう一度台湾に行って研修で会った人と話したいと思っています。これからは英語の授業をもっときちんと受けることと、英語でも中国語でも口に出して使って覚えていこうと思いました。中国語を勉強する方法は英語よりも限られている気がするので、とりあえずこれからも中国語の授業をとり、語学強化コースを今まで知らなかったので参加しようと思います。





長野 望江 工学部電気電子工学科 (2014年度入学)

この研修で、私は様々な経験をしました。その中でも印象的な二つの事について、書いていきます。

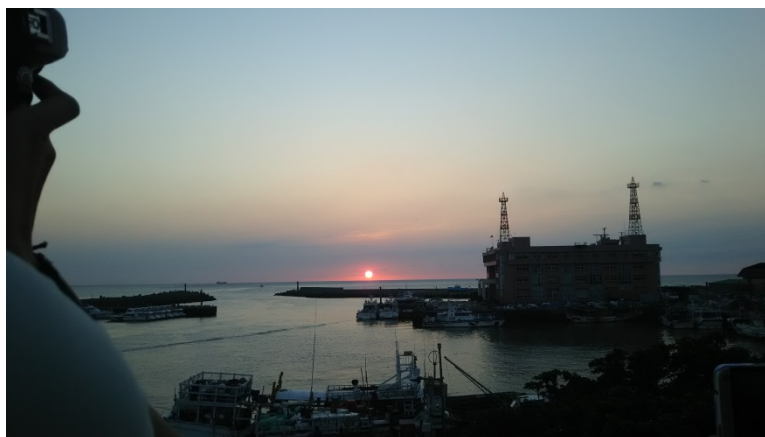
一つは、話すことについてです。私は、人と話をし、自分の事を伝えるのが苦手です。しかし、この研修では話さなければ中国語の勉強にならず、また行動ができませんでした。日本語同士でさえ難しく、中国語で上手く会話ができるか、ずっと不安でした。しかし、実際に生活して話してみるとその不安はなくなっていました。研修では現地の方と多く話す機会があり、私は周りに比べ話さない方でしたが、少し話すだけでも、伝わると自信ができました。中々伝わらないときは歯がゆく、諦めてしまうことも多くありましたが、少しの自信が次頑張ろうと思う糧になりました。中国語で会話するのはひどく大変でしたが、自分の言葉が通じる喜びを知ることが出来て良かったと思います。



二つ目は、文化や生活です。事前学習である程度の事は学び理解したつもりでしたが、実際に生活してみると自分の生活との違いに驚いてばかりでした。頭で理解し、分かっていたつもりでしたが、それでも今まで日本で生活して染みついた生活習慣はすぐには台湾に馴染めませんでした。「郷に入っては郷に従え」とありますが、難しいことだと感じました。また、失礼なことではありますが、思っていたよりも人がとても親切だなと感じました。ニュースや噂で様々なその国の人の印象がありますが、全くそのようなことはありませんでした。文化や生活が違って、人の優しさは同じなのだと感じました。

また色々な国を実際に訪ねてみたいと思うようになりました。テレビや本で見ただけでは分からない、また分かっても上手く対応できないことを、その国で体験し、自分の成長に繋がりたいです。また、多くの人と知り合い、国の違いがあってもその人自身を見られるようになりたいと思いました。そのためにも、語学の勉強や人と話すことについて学び、自分の能力を高めていきたいと思います。

研修中全てが上手くいったとはとても言えませんが、研修中の一つ一つが自分の成長につながったと思います。台湾や中国語を学べるだけでなく、自分の今までの欠点を見つめ直し、それを成長に繋げるきっかけにもなりました。また、機会があれば研修に参加してみたいです。



田中 祐生 工学部機械物理系学科 (2015 年度入学)

台湾研修に参加させて頂いて自分の英語力の低さを強く感じました。また、英語力の必要性について身を持って感じることができました。今回は中国語を学ぶということでしたが、TA さんや先生方と会話する際にはほとんど英語を用いて会話していました。TA さんや先生が話して下さる英語は、ほぼ聞き取れましたが、自分の意思を上手に伝えるのは非常に難しく感じました。もっと流暢に会話できたらもっと会話が弾んで楽しくなるのにとつくづく思いました。

そして今回の研修では普段の授業でも生かせる力が着けられたと思っています。台湾はもろんのことではありますが、会話はすべて中国語、英語のどちらかになります。このような環境にいるといつの間にか英語、中国語を使うのに今まで感じていた抵抗を無くすことができました。通じた時にはうれしくなっていて、逆にどんどん積極的に話かけて行こうという気持ちになれました。この快感を忘れずに、これからの中国語等の授業で積極的に発言していきたいと思います。

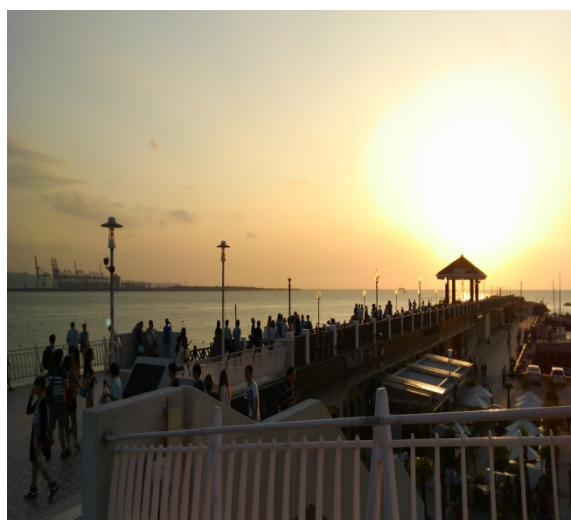
また、これからの語学の学習には話す、聞くという二つの作業が大切であると思いました。私は聞くことは以前から心がけていましたが、話すということは疎かにしていたと思います。なぜかという先ほど申した通り、自分は相手の言っていることは分かっても、いざ自分の意思を英語で話そうとすると片言の英語でしか話せなかったり、自分の英語の発音は相手に通じなかったからです。日本ではあまりそこを意識なくても通じてしまいましたが、台湾では今まで意識しなかった舌の使い方の大切さを学ぶことができました。これからは、留学生と会話したり、TED などのスピーチをリピートしたりし、自分の意思を伝えるための力を鍛える機会を積極的に作っていこうと思います。

今後、今回の研修で学んだことを活かし、語学アップに励んでいこうと思っています。そして将来的にはより海外の方と滑らかなコミュニケーションを取り、たくさんの教養を身に付けて行きたいです。



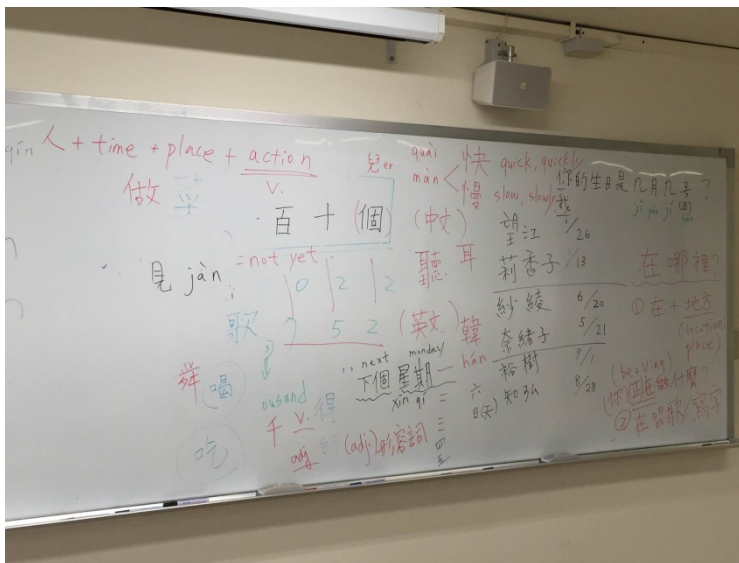
杉浦 里歩 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

この研修は中国語を学ぶことはもちろん、観光に行ったり、美味しいものを食べたり、台湾の学生さんと交流したりと盛りだくさんでした。楽しかったこと、苦勞したことなどの様々な経験を、これからの大学生活や自分の将来を考えていく中で生かせればと思っています。研修終えて、私が最も成長したと思えることは中国語です。私は研修に参加する前は中国語が全く話せず、初日は挨拶すらもままならない状態でした。台湾には英語や日本語が話せる人が多かったので、自分の勉強不足をととても情けなく思いました。しかし、先生の丁寧な授業や買い物などを通して、だんだん先生の中国語での指示が分かるようになり、自分で買い物ができるようになりました。初めは台湾やその他外国の方とどうやって会話したらいいのか分からなかったけれど、中国語や英語、身振り手振りを使うことで会話できたり、自分の言いたいことが伝えられたときは嬉しかったです。言葉だけでなく、身振り手振りなどコミュニケーションをとる手段はいろいろあることを実感しました。中国語は発音が難しく、まだまだ聞き取ったり会話したりできないので、これからも勉強を続けていきたいと思っています。また、研修中は日本にいる時より体調や安全に気を使ったり、困ったことを中国語や英語で何とか伝えたり、最終発表の準備をしたりと考えなければいけないことがたくさんありました。私は普段の生活では体調や安全をあまり意識していなかったり、できないことは人任せにすることがあるので、研修中に困ったことや思いがけないことが起きた時、自分はどうか動けばいいのかを迷う時がありました。このことから、私は自分の知識や経験の少なさや判断力の無さを感じました。この他にも研修を通して自分に足りないことがたくさん見つかったので、これからは普段の生活から意識して、できることを増やしたり、知識や考えの幅を広げていきたいと思っています。毎日の積み重ねや普段の生活で身につけてきたことの大切さを身にしみて感じました。私はこの研修に参加したことで、大学で勉強していることや自分の将来を以前より広い視野で考えられるようになったように感じます。また、日本の魅力や日本と海外の違いも感じられたように思います。この研修で学んだこと、実につけたことを大切にして、何かにチャレンジしたいと思ったとき、何か決断したいと思ったとき、自分の支えになればと思います。



嶋津 裕樹 工学部社会開発システム工学科 (2013 年度入学)

今回台湾銘傳大学中国語研修プログラムに参加して、参加前に比べて自分自身飛躍的に成長したと思います。今回のプログラムを受ける前までは見ず知らずの人と寝食を共にするという経験はほとんどなく、非常に貴重な経験になりました。将来的に海外で働けたらいいなと感じている一方で海外に行くことを恐れている自分もいて、今回留学と



いう形で海外の経験が積めたことは非常に今後役に立つと思いました。研修先の先生や TA の方たちは基本的に英語と中国語しか話すことができないので必死に何を話しているのか聞き取ろうと集中しやすい環境でした。先生の話すスピードも最初速すぎて聞き取ることができずにいましたが毎日聞いていると耳が慣れて最後の週あたりでは意味が分からずとも話すスピード自体は速いと感じなくなりました。今後も中国語、英語の勉強を続け卒業後台湾で働けるように努力していきたいと思いました。研修中、日本語学科の大学生達と触れ合いました。彼らは着物の着方を学んだり礼儀作法なども日本人より詳しくったりと驚きました。また、日本語もたいへん流暢で自分も負けていられないなと思いました。研修先の銘傳大学からも毎年何人か鳥取大学に交換留学に来ていて、後期は語学シャワー室を利用してそういった沢山の留学生と触れ合っていきたいと思いました。今後チャレンジしていきたいこととしては、現地の言葉だけでなく現地の文化や習慣なども留学生の方たちから学べたらいいなと思っています。自分は社会開発という学科に所属していて、都市計画に携われるような職に就きたいと思っています。台湾という国はとても公共交通が充実していて、MRT やバスなど、日本と違い沢山の利用客であふれています。日本も都心部では充実していますがそれ以外の地域（鳥取）などは過疎化などから問題となっています。海外のインフラ整備を直に見ることによって「今後の日本はどのようにしたらいいのか？」また、「日本のこういうところを海外にも取り入れてみたい」などという考えが浮かび上がり今後自分が就くだろう職に大きな利益をもたらしてくれました。



辰己 竜太郎 工学部機械物理系学科 (2015年度入学)

今回の台湾中国語研修プログラムは初めての海外渡航だったので毎日が刺激的で日本では味わえないような経験をたくさんできました。大学の第二外国語の授業として中国語を学ぶまで、中国語を学習する機会がなかったので基本的な挨拶しかできず自己紹介もできない状態で研修に参加しました。

初めの授業は簡単な自己紹介のテストをして二つのクラスの分けるといものでしたが、中国語で What、When、Where などの簡単な疑問詞もわからず担当の先生が英語で話してくれるまで答えることができず基本的なことをする



クラスにいきました。初めは落ち込んでもっと中国語を勉強してくればよかったと思っていました。実際、町中や担当の先生やTAさんとは主に英語で会話することしかできず、積極的にしゃべりかけたものの日常会話で中国語の能力を伸ばすことはあまりできませんでした。授業では発音をととても大事にした進め方でわからないところは先生にととても丁寧に教えていただき一週間もたつと夜市などで買い物をする際習った中国語で注文することもできささやかなことでしたがとても嬉しく、中学、高校生の際は嫌いだった言語学習の本当の面白さを感じることができました。英語を習い始めていた時は身近に母国語が英語圏の方がおらず、本当の面白さなど一切わからず、受験のためだけを思って勉強していました。ですが今ではもっと海外の方と交流を持ちたい、もっと新しいことを学びたいという気持ちが芽生えまだまだ能力不足で勉強をする必要がありますが、一年間の留学プログラムに参加したいと思っています。今回の研修の前から鳥取大学に一月の日本語研修で来ていた銘傳大学日本語学科の学生たちと友達になっていたため新たに友達を作ることは簡単にできました。

日常会話でよく使う中国語を教えてもらうことが多くありましたが会話は日本語ができる子とは日本語か英語で、中国語で話すことはなく自分から中国語で話そうとすることが少ししかなく、とても後悔しています。帰国後は自ら学習する時間をもっと増やし今後何が必要で何のために勉強するのかを考えて学習していきたいと思います。

今後は鳥取大学の留学プログラムだけでなく他の機関の様々な留学プログラムにも積極的に参加し回外留学経験を積むことが自分に必要なことであり、やっていきたいと思っています。



小林 和生 社会システム土木系学科 (2015 年度入学)

海外経験がなかったため、研修が始まると目の前は新しいもので溢れていて、経験することが全て新鮮でした。物の値段や風習、食事など、日本との違いを気づくことができ、とても良い体験ができました。そして、違いに気づくことによって日本という国をより一層理解できたのではないかと思います。

お世話になった現地の人とコミュニケーションをとる際に、英語を使うこと多く自分の英語力の乏しさを実感し、研修中、中国語の他にも英語の勉強をしていました。やはり、英語力はどの国でも求められているため、今後も英語の学習を続けていきたい。

初めの頃は現地の人言葉の全く聞き取って理解をするということができず、一緒にいた台湾人の知り合いに助けをもらうことが多くありました。しかし、助けをもらうだけでは自分は何も成長をしないと、夜市で買い物をする際、英語を使わず中国語だけでやり取りをするということをしていると、値段はもちろんのこと、「袋は必要か？」などの基本的なことが聞き取れるようになってきて、嬉しく思いました。自分の言いたい言葉が発音の間違いのせいで伝わらないこともありましたが、その際は辞書でピンインを確認して後日にその言葉を使うこともしました。困難は人に頼ることで楽に解決をすることができることもありますが、自分でまずどうにかしようとする中で、自分自身を高めることができると思いました。

私は将来土木関係の仕事に就こうと考えているため、研修中に台湾のインフラについて注目していました。地下鉄の駅構内はきれいで、電子カードでスムーズに利用することができ、日本との違いはほとんどなく驚きました。道路は補修工事が必要な場所もありましたが、基本的に道路整備はされていました。アジアのインフラ状況の一部を実際に見るという貴重な経験ができました。

研修では中国語の授業だけではなく、文化体験や博物館に行くなどと充実していて、参加してよかったと思います。



写真 1 (士林夜市)



写真 2 (文化体験)

## ウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラム

国・地域：ウガンダ

研修機関：マケレレ大学

参加者数：9名

期間：2015年8月24日（月）～9月8日（火）

内容：アフリカの東に位置するウガンダは、ナイル川の源流があり、アフリカで最大規模の大きさを誇るビクトリア湖に面しています。その緑豊かな環境にちなんで「アフリカの真珠 (Pearl of Africa)」とも呼ばれています。

全学を対象とした研修では初めてアフリカ大陸で実施した本研修は、ウガンダにおよそ2週間滞在し、主に講義の受講とフィールド研修で構成されています。

講義では、ウガンダの首都カンパラに位置し国内で最も歴史のあるマケレレ大学に於いて、マケレレ大学教員による英語での授業（英語コミュニケーションスキル、ウガンダの歴史、文化、経済、医療事情、教育事情等）を受講したほか、在ウガンダ共和国日本国大使館や、JICA（独立行政法人 国際協力機構）の在ウガンダ事務所を訪問し、日本とウガンダとの外交関係や共同協力事業、ウガンダについての基礎知識などを日本語で学びました。

フィールド研修では、JICAのプロジェクトサイト、病院、紅茶や砂糖の生産現場などを訪問し、事前研修や講義で学んだ知識を更に深めるとともに、実際の現場で働く人の様々な声を聴く事により、多面的なものの見方を身につけるきっかけにもなりました。

また、現地の小学校やセカンダリースクール（日本の中学校～高校に相当）を訪問し、日本、鳥取、鳥取大学についてプレゼンテーションを行った後、折り紙やちぎり絵、書道などのアクティビティを実施し、交流しました。



安藤 杜之介 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

私がこのウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラムに参加した理由は、英語力の向上と開発途上国というものを一度自分の目で確かめて、農業の観点からウガンダという国を解き明かしてみたいと思ったからです。まず、日本とウガンダは気候が大きく異なっており、ウガンダに足を踏み入れた最初の印象は‘涼しい‘でした。赤道直下にあるため、蒸し暑いイメージを持っていたのですがそんなことはなく、カラッと過ごしやすい気候で、年中 26℃ くらいの気温で雨季と乾季があります。これに加えて、赤道直下にあるため日射量が豊富で、土地は肥沃という、農業をするにはもってこいの場所です。そのためアフリカで今後大きな問題となりうる食糧不足を解決するためのカギになってくるわけです。このように、ウガンダという国は周辺国との繋がりに対してとても重要な役割を果たしているわけです。

多くの人がウガンダに対する印象は治安が悪く、危険な印象を持っている方がおられるとおもうのですが、二週間ウガンダで過ごした身から言えば意外と安全で、快適な生活ができる場所だと思います。もちろん、引率の先生方のおかげもあるかもしれませんが、穏やかな人が多く、コミュニケーションも取りやすかったです。

また、この研修でいかに自分の英語力が低いかを思い知らされました。マケレレ大学でウガンダの農業・政治・医療などをテーマにした授業を受けたのですが難しい単語が多く、内容を十分に理解することができず、授業の最後にある質疑応答の時間では一度も自分の意見や質問を投げかけることができずとても悔しかったです。

学生三人に対して TA さんが一人ついてくださり、ショッピングセンターの買い出し、ウガンダの文化・習慣、プレゼン作成など様々な場面で助けてくださりとても感謝しています。最初は中々自分から TA さんに質問を投げかけることができなかつたのですが研修が終わるころには、自分が聞きたいことや話ができ、研修に参加する前より英語に対する苦手意識がだいぶ小さくなったと思います。

英語の勉強をするといっても、自分の中ではとても漠然としていて何からすればいいか全くわからなかつたのですが、現地の方とコミュニケーションをとっていく中で語学がいかに大切かを思い知らされ、実践的な英語力を身につけていきたいと思えました。また、この研修に参加して、今まで以上に海外で活躍できる人材になりたいと思うようになり、自分の専門分野だけでなく語学や、教養をもっと広げていきたいと思えました。最後になりましたが、この研修に携わって頂いた方々にとても感謝しております。



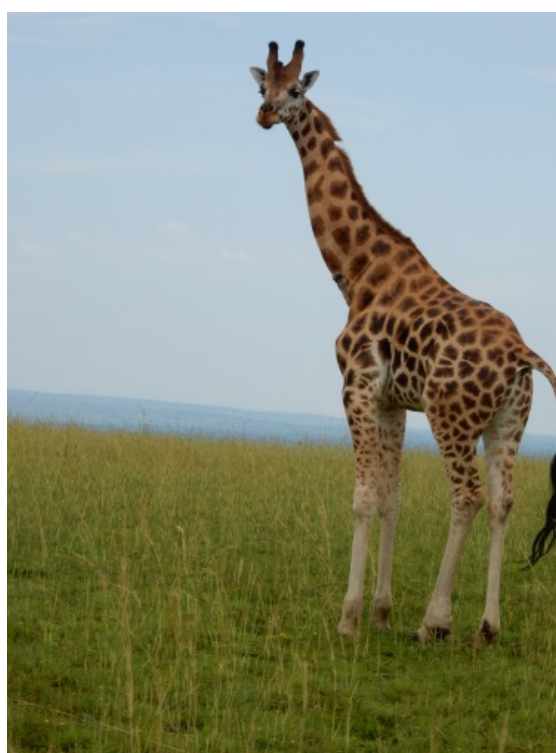


加藤 みな美 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

今回の研修に参加して、良い意味でアフリカのイメージが覆された。普段日本のテレビで見るアフリカのイメージは、貧困、紛争、飢餓というマイナスなイメージばかりだった。しかし、ウガンダに行くとそのような光景はあまり見られなかった。ウガンダは「Pearl Of Africa」と呼ばれており、自然が多く、農業が盛んな国で、人口の8割が農業従事者である。今のウガンダは、昔の日本みたいだと感じた。ウガンダの人たちは皆ニコニコしていて、特に子どもたちはバスを見つけると手を振ってくれた。学校訪問時も、生徒たちが積極的に話しかけてきてくれて、緊張していてなかなか話しかけることができなかった私は、ウガンダ人のフレンドリーさに沢山助けられた。普段日本で生活していると英語を話す機会は少なく、自分の英語に自信がなかったが、話してみると意外と通じるもので、臆せずに挑戦することが大事だと感じた。TAとして参加してくれた2人が10月から日本に留学にくるので、積極的に会話をしていこうと考えている。また、言いたいことがあっても、語彙力が少ないがために上手く話せないという場面が多くあったので、単語のインプットとアウトプットの両方をコツコツ行っていこうと思う。

今回の研修は今後の方向性のヒントになった。3年後期には、研究室の配属が控えておりどこの研究室に入ろうか悩んでいたが、研修に参加して自分の学びたいことが明確になった。研究室の配属までまだ時間があるので、今回の研修の振り返りを今後の学習に生かしていきたい。

また、JICA 事務所や JICA のネリカ米を研究している施設を訪問した際には、ネリカ米の普及活動やネリカ米、青年海外協力隊についてお話を伺うことができた。JICA の活動を生で見ることができたのはとてもいい経験となった。様々な話を聞く中で、ぜひ青年海外協力隊に参加してウガンダの農業の発展や教育の発展に貢献したいと思った。日本では経験することのできない貴重な体験をすることができた、充実した2週間となった。



吉田 のぞみ 医学部保健学科 (2013 年度入学)

ウガンダは 2006 年まで内戦が起こっていて元子ども兵や HIV/AIDS、貧困など様々な問題を抱えています。しかし同時に「アフリカの真珠」と言われるほど鮮やかな緑溢れる自然がありライオンやキリンなど野生動物がいて、気候も快適で魅力的な点も沢山持ち合わせています。ウガンダ人の性格は基本的に穏やかでホスピタリティが高く誠実な印象です。少しシヤイなどところもあり日本人と相性が良さそうな感じがしました。

プログラムでは 2 カ所の病院を見学しました。印象的だったのは患者さんの家族のケアをしているのが主に看護師ではなくて患者さんの家族であったことです。ウガンダでは看護学生は多数居ますが病院の経済的な事情により看護師を雇用できないという理由もあり現場では看護師が圧倒的に不足しています。看護師 1 人で患者さん 60~70 人受け持つこともあるそうです。そのような事情もあってか患者さんの家族が看護師の役割を担っているようでした。家族が患者さんのベッドの傍に布を敷いて寝泊りすることも少なくありません。病室の外には洗濯物が干してあったりお鍋や食材が置いてあったりと生活の様子が垣間見られました。このように家族の絆が深く、人と人の関わりが濃い様子を見て、少子化や核家族化が進んでいる日本と対比して思ったことは衛生面や技術面はこれから進歩していったとしてもこのような光景は残っていてほしいなということでした。途上国と聞くと現状維持よりは改善しなければならぬことが多くあるイメージが強かったので改善ではなく、このままであってほしいと感じたことが私自身新鮮でした。

今回の研修で興味の幅が広がり様々な知識や経験を得ることが出来ましたが、他学部の学生や TA さん、訪問先の方々と交流する中で多面的な視点を持って自分の意見や考えを持ちたり、他人の考えを理解するために研修で得た広く浅い知識や経験を深める必要があると感じました。そのため、まずは専門である看護の勉強により一層力を入れようと思います。その他にも英語やウガンダについてだけでなく自国の日本の歴史や政治・経済について外国人に説明できるように日々勉強しようと思います。ウガンダの未来に関わる人と交流を持つことで自分には何が出来るのだろうかと考える機会が何回もありウガンダという国を知った以上、この間に対してはこれから様々な経験を通して掘り下げていく責任があるのではないかと感じました。ありがとうございました。



(病室の外の様子)

橘 頼之 工学部生物応用工学科 (2014 年度入学)

今回、初めてアフリカにいきました。まず、人生で初めて自分はこの国では外国人であるということをあからさまに感じる事が出来ました。肌の色が全然違うので普通に歩いていっただけで目立ちます。だから現地の人たちも物珍しそうに見てきます。人種が異なる所にしても日本人がとくに少ない所に行かない限り中々感じる事が出来ないことなので新鮮でした。また、日本にいる外国人もこのような経験を日本でしているのだろうなと思いました。このプログラムでは、授業というより見学などの方が多かったのでたくさん色々な所に行く事が出来ました。その分疲れることは多かったですがとても楽しかったです。国立公園をはじめ工場、教育施設、病院、JICA、さらには日本大使館にも行きました。そこで大使ともお話しさせていただきました。ウガンダの農業をメインに教育や医療、文化を肌で感じ、学ぶ事が出来たと思います。しかし事前にもっとしっかりと調べて行くことより深く理解できるのだろうなとも感じました。そこは少し後悔しましたので、次回はこの後悔を活かしたいと思います。また三人の TA さんともたくさん話が出来てとても楽しかったです。会話の中で彼らは彼らの生活習慣などを話してくれました。日本では考えられないようなこともあり直接現地の人と関わることでインターネットなどでは調べられないことがわかるので非常に興味深かったです。会話の中で日本はどう？という返しが来るので自分の国について考えることも多かったです。その時々意外と日本のことについて知らないことが多いと感じました。自国について学ぶ必要も感じました。自分のあしで行き直接話を聞くことで学んだことは頭に残りやすく自分の視野を広げるうえで役に立つと思いました。このようなプログラムは普段出会うことのできない人々に会うことができたり、普段考えもしないような事を考えさせられるとてもよい機会だと思います。だから今後もプログラム等に参加して積極的に物事を学んでいきたいと思っています。



金山 昌央 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

今回ウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラムに参加した動機は、アフリカ大陸の国に行って現地の人々の考え方を知りたい、というものでした。研修参加前アフリカの人たちはアジアの人に比べて志向がポジティブだとのことで自殺率にも大きな差があると聞いていました。このことから実際に現地の人と対話したい、そしてその真相を明らかにしたい、そういったことを知るためにこのプログラムへの参加を決意しました。しかし、現状は英語の語学力がかなり低い状態だったため実際に現地の人とコミュニケーションが取れるのか研修参加前は不安に押しつぶされそうでした。

実際にプログラムに参加し一番に感じたことは、ウガンダ人と日本人の考えに大差がないこと。これまでのイメージは海外の人は日本に比べものをはっきり言い、あいまいな表現を嫌うというものでした。しかし、実際にウガンダの方々会話してみると意外とシャイな人が多く親近感を感じました。またそれだけではなくウガンダの方は『助け合う』ことを大切にしている日本よりも人と人とのつながりが強いように感じました。外国人である自分たちにもその精神は向けられ、現地でアクシデントが起きるたびに道行くウガンダ人に助けられたよう思います。ポジティブな考え方はこの考え方に基づいているように思います。助け合い文化は人と人とのつながりが希薄になりがちな日本でも見習うべきだと思います。

今回このプログラムに参加して自分の話す英語が伝わったことは大きな自身になりました。しかしながら、相手が何を言いたいかわからなかった場面や自分が言いたいことがうまく伝わらずにもどかしい思いをした場面も何度かありました。この経験を活かしてより語学力を上達させたいです。そして、次回またウガンダに行く際にはより上達した英語でより深い話をしたいです。現地でお世話になった方々との再会を目指し英語の勉強をより一層励んでいきたいと思っております。



秋本 弘太 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

この夏、私はウガンダマケレレ大学海外実践教育プログラムに参加しました。正直参加する前は、本当にウガンダに行って大丈夫か、病気にかからないか、食べ物は大丈夫か、などの様々な不安がありました。また飛行機も合計で17時間も乗るので体調なども心配していました。しかし実際に行ってみると、日本とは全く違う光景に引き込まれていました。景色すべてが刺激的だったのを今でも鮮明に覚えています。ウガンダを実際にこの目で見られたことはこの研修に参加した中でもっともよい経験になったと思います。

またこの研修では現地で実際に働いている日本人の人たちとお話しを聞かせていただく機会が何回かありました。そこで実際に話を聞いている中で自分が感じたのは、「正直自分とは見ている世界が違う」ということです。具体的なエピソードを挙げると、日本の大使館で三等書記としてらっしゃる橋本 仁さんと夕食をさせていただいたときに、橋本さんが「この中に将来国連で働きたい人がいますか？」という質問をされたときに、私の頭の中には将来に国連という言葉がなくポカーンとしてしまったのを覚えています。ウガンダではたくさんの日本人の話の話を聞かせていただきましたが、今の自分とはかけ離れすぎていて「すごい」としか言えませんでした。「今の自分には足りないものが多すぎる」という悔しさがありました。自分とその海外では働く人と何が違うかと考えると、知識もちろんそうですが、一番違うと感じたのは行動力の差です。これが必要だからそのためにこれをやる。やるのが当たり前。といったように今の自分とは全然違っていました。今自分に必要なのは英語力。まずはこれを磨く必要がある。日本でこれを身につける。必要だからやる、そう決めました。

またウガンダの研修と一緒に参加した日本人の友達や現地で僕たちのサポートをしてくれたマケレレ大学のTAの人たち、このプログラムを計画してくれて引率してくれたコーディネーターの人たちと出会えたことが自分にとってこのプログラムに参加してもっともよかったことだと思います。

今回の研修は2週間と短いものでした。また機会があればぜひ参加したいです。



小山 美佳 農学部共同獣医学科 (2013 年度入学)

ウガンダプログラムにおける私の最大の目的は、国立公園を訪れることでした。マーチソンフォールズ国立公園では見渡す限りの草原に多くの野生動物が見られ、念願の夢を叶えることができました。同時に、ウガンダ国内の施設をいくつか訪ね、多くの人に出会い、その価値観に触れました。これらの経験は新鮮な感動をもって私を刺激し、今私の心境に変化をもたらしています。

プログラムでは、マケレレ大学にてウガンダの歴史、教育、農業や衛生等の各分野について講義を受けました。その後、施設を実際に訪問し理解を深めました。移動を含め、研修を通して感じたのは農業の盛んさです。道端に目を遣ると大体牛、山羊や鶏が見つかりますし、バナナやアボカドなど食用になる木があちこちに植えられていました。また、マケレレ大学にて飼育されている実験動物を見る機会がありました。実験動物と聞いて私がまず思い浮かべるのはマウスやラットですが、それらの姿は見当たりませんでした。疑問に思っ質問したところ、マウス等を使用する実験よりも、豚や牛など畜産振興のための実験の方が主流ということのようでした。農業が生活の一部であり、学問がそれらを支えているのだらうと思いました。

私が普段大学で講義を受ける際には目の前の事柄に集中しがちで、その向こうの人や生活に考えが及ぶことは稀です。私は将来獣医師になるつもりですが、日本獣医師会の表明する獣医師の誓いには「人の健康と福祉の増進に努める」という一節があります。ウガンダで見た学問と生活関係からは、自分が何のために学ぶのか考えさせられました。

さて、日本に帰国してからですが、私はとある動物園に行きました。そこではウガンダで見られた動物の多くを見ることができました。これを受けて、単に動物を見て楽しむだけならば、外国に行かずとも日本国内で満足できるという思いを強くしました。プログラムに参加する前から感じていたことですが、実際に経験しなければ確信に至らないまま「アフリカの野生動物」への憧れを抱き続けていたことと思います。今回の経験から、幾分か冷静な視点を得られました。そして、そこでなければ出来ないことか否か、が物事の判断基準として強く刻まれました。この変化は、今後私の選択に大きく影響するでしょう。



深井 彩代 農学部生物資源環境学科 (2013 年度)

今回の研修で感じた自分の変化は自分の意見を英語で相手へ伝えたこと。TA さんが毎日一緒にいてくれていたため、話をする機会がとても多く、言い換えや例をいくつかあげて、相手に自分の言いたいことを伝えるということができたと思う。真面目な話を英語で議論したことがあまりなかったし、相手の意見もわかるけれど、私の意見は〜と展開するのは、とても大変だったけれど、その分面白くてもっと話したくなった。また授業で習った手法が実際にウガンダで行われていて、嬉しくなった。ただ話している中で自分の無知さやリスニング力の乏しさ、語彙の少なさ、自分の勉強不足などを改めて痛感した。もっと自分が聞き取れたら、スムーズに話ができるし、より深い話ができるだろうに、と悔しかった。それでも一緒に行ったメンバーもみんな自分の意見などを伝えようと頑張っていて、自分も頑張らないといけないと改めて刺激をもらった。もっとリスニングができるようになりたい。また専門的な言葉が全然わからなかったので、きちんと勉強したい。

また小中学校でのアクティビティやプレゼンはそれぞれの班に任せてくれたので、事前に準備することから、英語で大勢に説明をする難しさを感じた。でもその分聞いてくれたときやアクティビティが無事に終わったときは嬉しかったし、自分がこのように感じるのはとても新鮮で面白かった。またする機会があったら積極的に自分から動いてみたい。そして研修を通して色々な文化に触れることや、色々な人とコミュニケーションを取る楽しさに気付いた。将来はやっぱりアフリカで貢献できることはないかなと、行く前よりずっと具体的に考えるようになった。

また今回自分の中で新しいアフリカを発見することができたと思う。ウガンダの自然が多く緑に溢れている景色は、自分のアフリカへのイメージに良い意味で別の印象を持たせてくれた。また実際に働いている人の考えや意見を聞くことができたので、それもまた良い刺激になった。一方でそれを受け取る側の話も聞くことができ、様々な視点から物事を捉える必要性を強く感じた。この考え方は今後も忘れないように自分の中に残しておこうと思う。

今回お世話になったメンバーとは、これからも日本人とウガンダ人と問わず、つながってほしいと思う。TA さんの 2 人は鳥取大学に来るので、これからも仲良く関わっていきたいしもう一人の TA さんとは、メールでつながってほしいし、またその TA さんに会いに、ウガンダへ行きたい。



曾田 真澄 医学部保健学科 (2015 年度入学)

私がこのプログラムを志望したのは、以前からアフリカの医療や教育に興味があり、ウガンダの病院や学校訪問を通して現地の生活習慣や考え方の違いに触れることで、将来働く上でも、大学生活を送る上でも自分の糧になるような学びを多く得られるのではないかと思います。

研修に参加するにあたって、英語が苦手なので大学での授業や TA さんとの会話についていけるかが心配でしたが、英語が理解できないときはゆっくり喋ってくださったり、私のつたない英語をじっくり聞いてくださったりと、ウガンダの人々は寛容な方が多い印象を受けました。また、私は人前で意見を言うことが苦手だったのですが、今回の研修で意見を言ったり質問をしないと相手にされないということを感じ、できるだけ積極的に質問などをするようにしました。研修に参加する前と比べて意見を言うことへの苦手意識は少なくなった気がします。病院見学では国立病院と地域中核病院を訪問することができました。日本の病院とは全く違う環境で、その様子は野戦病院だという人もいます。日本のように四人部屋や個室といった病室はなく、広い部屋に多くのベッドがただ並んでいるだけ。ベッドの脇には患者の家族が座っています。病院食はなく、家族が患者の食事を作り、泊まり込みで身の回りの世話をします。私はそこにウガンダの医療の良さを感じました。確かに日本の医療は進んでおり、平均寿命は世界トップレベルです。しかし、本人が苦しむ延命治療が行われていたりといった現状があります。そのような日本の医療に比べて、確かにウガンダの医療は遅れていますが、家族に見守られ、最期まで患者が生きたいように生きるという環境は日本が見習わなければならない点ではないかと感じました。

研修に行く前はアフリカということもあり、治安やカルチャーショックが心配で、二週間という短い期間ではありましたが自分がウガンダでやっていけるのか、参加するのは早すぎたのではないかという気持ちがありました。しかし、研修を終えて思うのは、この研修に参加して本当に良かったということです。辛いこともありました。この研修を通して多くの事を学び、自分の価値観も変わりました。この研修で学んだことをこれからの大学生活に生かしていきたいです。そして再びウガンダを訪れたいと思っています。





## 夏期大山短期集中英語研修

国・地域：日本（鳥取県西伯郡）

研修機関：大山共同利用研修所

参加者数：14 名

期間：2015 年 9 月 11 日（金）～9 月 16 日（水）

内容：本学英語講師による英語の実践能力（会話力、ディベート力、聴解力、プレゼンテーション能力）の向上を目指した集中合宿を行います。授業は英語で進められ、国際的なトピックを扱うことで、国際理解力やグローバルな価値観を養うことができます。授業中だけでなく生活場面でも英語で会話しますので、ほぼ英語漬けの状態です。また、外国人留学生在が TA として参加し、参加者の英語学習をきめ細やかにサポートします。途中で、大山寺での座禅や精進料理体験、みるくの里へのフィールドトリップ（課外学習）に参加し、日本の文化に触れることもできます。



岡田 遥江 農学部共同獣医学科 (2013 年度入学)

今回の研修で私が最も感じたことは、やはり英語の聞き取りが上手くできないということでした。知っている単語でも聞き取るとなると、とても難しかったです。英語がスムーズに聞き取れないと、会話もスムーズに進みません。初めの2日間ほどは、初めて会った人たちと英語で会話するのが少しストレスでした。それでも英語でどんどん会話していかないことには上達できないと考え、できるだけ自分から英語で話しかけていくように心がけました。6日間の研修が終わって、以前よりも英語が聞き取れるようになったかと言われると、正直よくわかりません。しかし、もっと自分の英語の会話能力を向上させたい、留学したいという気持ちは高まりました。

今回の研修で最も良かったのは、3人のTAさんが参加してくれたことだと考えます。マレーシア、ボツワナ、中国それぞれの国のお話を聞いて、それぞれの国に興味が湧きました。また反対に、日本のことについて彼らに話そうと思うと、案外難しいということにも気がつきました。外国の人に日本について話すには、英語のコミュニケーション能力はもちろん、日本の文化、歴史、経済、政治などについてしっかり勉強することが必要であると感じました。最後のプレゼンテーションでは、自分の出身地の伝統料理について発表しました。私は大阪出身で、たこ焼きが大好きなので、たこ焼きについて発表しました。しかし、プレゼンの準備をするにあたって、自分が普段食べているたこ焼きについて知らないことがたくさんあるということにも気がつきました。またパワーポイントを使った英語でのプレゼンは、私にとって初めての経験でしたが、自分の好きなたこ焼きについて発表したということもあり、楽しく準備、発表することができました。私のプレゼンについて、質問もたくさんしていただき、とてもよい経験ができました。

その他に、大山寺で座禅を体験したことや精進料理を食べたことは印象的でした。ここでもまた日本の文化や歴史を勉強することができました。座禅は修行のために行うもので、辛く、大変なものだと思っていましたが、実は自分が考えていたほど厳しいものではなく、リラックスして体験することができました。また今回の研修では、字幕なしで海外の映画を見ました。物語の2割ほどしか理解できませんでしたが、映画のあとに友達とそれぞれに理解できたところを話し合っって楽しむことができました。



ミルクの里



アイスクリーム作り

広瀬 幸音 農学部生物資源環境学科 (2015年度入学)

私は大山研修参加前、人見知りで、やりたいことがあっても一步踏み出すことができずに、周りに流されながら時間だけが過ぎていくような生活を送っていました。しかし、この研修がきっかけでこれからの大学生活をこれからどう過ごすのか明確な目標ができ、また目標を達成するためのやる気も沸いてきました。この研修は私にとって大学生活の分岐点になったと思います。

具体的に私が変わったと思う点は2つあります。まずは、英語のコミュニケーション能力は努力次第で本当に目に見えて向上すると知ったことです。中学校から6年間勉強してきた英語ですが、リーディング、ライティングはある程度はできてもスピーキングは話す機会がないからか高校のタイの研修旅行でも本当に単語を繋げてでしか話せませんでした。この大山研修は日本にいながら英語しか使ってはいけないというルールがあったことで、図らずも日本語が出てきてしまうことがありましたが、徐々にこのシチュエーションにはどのようなフレーズを使うかという法則が見えてきました。それがわかると英語を話すことはそんなに難しくないと感じられるようになりました。実際、TAの方が話す英語も簡単に会話に使う単語や文法もほとんど今まで習ったものでした。驚いたのは一日中英語でどう表現するかを考えながら生活していたら、自分の思考まで英語になっていたことです。このことがきっかけで英語に対する親近感が沸き、これからも英語を頑張っていこうというやる気につながりました。これからは、TOEICのスコアアップと来年夏の同プログラム海外研修で今回よりしっかり英語で会話できるようになることが目標です。

2つ目は、人見知りが緩和したと感じたことです。今回の研修に友達はいましたが始まる前、研修中はその友達としか話さないのだろうと考えていました。しかし、日本人同士でも英語で会話するというルールにより人見知りしている暇もなく、お互い単語を教えあったり助け舟を出したりして研修が終わるころには学年問わずとても仲良くなっていました。人と仲良くなるのがこんなに簡単なのかと気づきましたし、英語で話さなきゃいけない状況でここまで仲良くなれたのだから日本語なら怖いものはないと考えられるようになりました。

他にもプレゼン能力だったり、国際問題について考えたり、この研修は私にとって将来を考えるきっかけとなりました。とても有意義な一週間でした。



稲垣 岬 農学研究科 (2013 年度入学)

今まで、英語学習の必要性を感じながらも、スピーキングの機会がなく、また自分から語学シャワー室に行くことなどありませんでした。しかし、今回の研修に参加し、TA さんや先生方と会話することができ、英語を話すことの楽しさや充実感を得ました。スピーキングは相手がいないと成り立たないことなので、有難い機会でした。

海外に行くと、日本のことを聞かれ、伝える機会が多くあります。本研修では、大山寺で座禅体験や精進料理を食べ、日本文化を勉強することができました。その後、仏教における修行について調べたり、体験したとこをまとめたりし、英語で発表しました。この体験は、今後外国人との交流において、日本についての話題材料になります。そしてこのフィードバックのおかげで、今後、英語での説明がスムーズに行えます。プログラムでは、主に食事を題材とし、勉強をしました。みるくの里でのアイスクリーム作り体験・TA の出身国における郷土料理についてのプレゼンテーション聴講・レシピの説明方法・出身地域のご当地食についてのプレゼンテーション発表などがありました。これらも、今後外国に出たときや、外国人との会話で必要な話題であると先生がおっしゃっていました。私もぜひ、この研修で体験した事や発表したプレゼンテーションを外国人の前でもう一度アウトプットしたいと思っています。

また、鳥取大学が運営している他プログラムである、ウガンダマケレレ大学研修プログラムについて、日本とアフリカの関係についての勉強を兼ねた、プレゼンテーションを受けました。こちらは、自分が日本人であることや、世界における日本の立ち位置、日本経済についてなどを考えさせられるものとなりました。「ただ英語で多文化社会の人と話すのが楽しい！」だけでなく、日本人として背負っていくものや目指すべき道を示していただきました。加えて、TA で来て下さった留学生のみなさんの能力が高かったことで、私は、自分がこれから日本を支える世代として危機感を持ったと同時に、努力するためのモチベーションにもなりました。

私は、将来、開発途上国で農業インフラに関する業務に携わり国際社会に貢献していきたいと考えています。私は今までに、いろんな国に旅行に行き、鳥取大学の留学プログラムにも何度か参加しました。海外には楽しいことがたくさん待っており、親切なホストファミリーが素敵な思い出をくれます。しかし、日本はどうでしょうか。日本は排他的な社会であり、多くの留学生は「冷たい日本」を抱いているそうです。私は、世界中でもらった親切さや暖かさを日本への留学生に返し、少しでも日本に来たことを楽しんで欲しいと思っています。今回 TA さん達に会うことができたので、今後その機会を持ちたいと思っています。本研修では、留学ではできない体験ができました。これからは、英語学習に加えてグローバル人材になれるようにも努力をしたいです。



岡本 珠里 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

私には大学在学中に英語を話せるようになるという目標があるのですが、まず何をどのように勉強したらいいのかわからず、実際には話せるようになるための努力はしていなかったため、このままの状態ではいけないと思い、何かきっかけを作るために今回この大山短期集中英語研修に参加させていただきました。研修は6日間という短いものでしたが、内容がとても充実しており、自分の中で何が足りないのか、何が課題であるのかということを見つけることができたので、これからどういう風に勉強していけばいいのかということがわかりました。また、英語の学習に対するモチベーションも向上しました。

研修で得られた経験としては、一日中英語で話すという環境で過ごしたこと、TAさんの英語でのプレゼンテーションを聞いたこと、そして、英語でパワーポイントと原稿を作りプレゼンテーションをしたことです。一日中英語で話す機会というのは日本にいるとなかなか作ることができないので、貴重な経験となりました。TAさんのプレゼンテーションは聞き取るのが難しかったのですが、三つの国の異なる英語の発音をたくさん聞くことができ勉強になりました。英語でのプレゼンテーションは、自分の言いたいことを英語で表現するのが難しかったのですが、TAさんに教えていただき、いろんな表現の仕方を学ぶことができました。今回の研修で会話での様々な表現や単語を学ぶことができたので、今後も学び続けて知識を増やしていきたいです。会話を上達させるためにはより多く話すことが重要なので、今回のような英語研修に参加することによって話す機会を作っていこうと思います。また、アクティビティでも様々な経験ができ、楽しむことができました。座禅や精進料理は初めてだったので良い経験になりました。

今回、研修に参加して気付いたことは、英語でたくさん話そうという積極性が足りていないことです。次、英語研修に参加するときにはもっと積極的に英語を話したいと思います。ほかにも多くの課題を見つけることができたので、これからその課題を解決していけるような勉強をしていき、英語力を向上させたいです。そして、今後様々なプログラムに参加し、海外に行って多くの英語に触れ、さらに英語力を向上させ、外国人と英語でコミュニケーションをとれるようになりたいです。今回この研修に参加したことが、大学生のうちに英語を話せるようになるという目標を達成するための大きな一歩となったと思うので、これからも継続して頑張ります。



森川 彩 工学部生物応用工学科 (2012年度入学)

この研修に参加して私自身が感じ取った変化は、初対面の人と会話を交わすことに少し慣れたということだ。共通点がなかなかみつからない場合、少し世間話をして後はあまり会話がはずまないことが多々あった。また、この研修では英語での会話が基本であるので、なおさら会話をすることに後ろ向きになりかけていた。しかし、参加者の多くは将来海外へ渡航したいと考えている人や、英語能力の向上を目指す人などで基本会話が絶えなかった。会話上手な人も多いため、私もその人の話術を参考にしたり、会話を手助けしてもらったりするに従い、初対面での会話が億劫だと考えていた私は、徐々に会話も楽しいものだなと感じることができた。この経験により、私は会話をするという根本の能力、そしてそれを拙いながらも英語で伝える能力の2つの能力の向上が感じ取ることができた。会話の能力は上記のとおりだが、英語で自分の意思を伝えるというのは思ったよりも難しいと感じた。振り返ってみると、私は今まであまり英語を用いて日常的な会話をするという経験をしてこなかった。そのため、「醤油を取ってください」にしても、give でいいのか、pass でいいのかといちいち悩んでしまい、なかなか会話がスムーズにいかなかった。しかし、こういうものは慣れが一番大事で、最終日近くになるとそれなりに話せるようになっていた。

また、この研修で得た経験としては、会話力もさることながら、語彙力の重要性にも気が付くことができた。研修中、とにかく分からない語彙はノートに書き込むように教えられた。単語帳を用いて語彙の充実を図ることも重要だが、このようにまず自分がわからないものを中心に学んでいく姿勢もとても大切だということが分かった。私は4年生であるので、講義を受ける機会はあまりないのだが、論文を読む機会は豊富にあるので、このような身近にあるものを用いて、自分の専門知識の語彙の充実も図っていきたいと思っている。



成田 一貴 工学部知能情報工学科 (2010 年度入学)

今回の大山生後研修プログラムに参加して、まず感じたのは自分の英語力の低さです。オーストラリア留学中はもう少しスムーズに英語でのコミュニケーションがとれていたにもかかわらず、今回の合宿では言葉が全く出でこず、帰国してからの自分の英語力の低下を痛感しました。やはり、英語は使い続けないと瞬時に衰えてしまうものであると改めて感じました。今回の合宿では、ブルックス先生の厳しい指導のおかげで、大多数が日本人生徒の環境の中にもかかわらず、英語で会話する、英語を使用するという状況に身を置くことができました。これは、私にとって一番望んでいたことでありとても身になりました。

さらに今回の合宿では、単純な英語学習だけでなく、日本の文化やプレゼンテーションの仕方、規律ある中での集団生活等、人間力の向上を図ることもできました。大山寺での初めての座禅体験や精進料理から日本の文化や習慣のルーツを学ぶと共に、日本人として日本のことをもっと知らなければならないという気持ちにさせられました。プレゼンテーションの指導では、基本的な英語のフレーズやプレゼンテーション資料の作成の仕方はもちろん、他生徒やフランクさんのプレゼンを聴くことにより、リスニング力のトレーニングにもなりました。ブルックス先生や関野さんから、英語の学習の仕方や、日本や世界の情勢なども教えていただき、英語の大切さというものを改めて学びました。

そんな中でも、私にとって今回の合宿で一番貴重だったのは、3名の TA さんと出会えたことです。TA の方々は皆、多くのそして高レベルの能力を持っておられました。3名のプレゼンテーションを見せていただきましたが、とても上手で引き込まれるようでした。英語力もさることながら、各々が自国を飛び出して、世界に目を向けて挑戦しておられる姿を見せていただき、とても感銘を受け、私が今後成長していくための活力になりました。人間として心から尊敬できる TA さん達との出会いが、私がこの合宿で最も心動かされた出来事です。

今後も、英語の学習において、デスクワークだけでなく英語でのコミュニケーションを持続させていき、さらにグローバルな視点をもって、多くのことに挑戦していき、チャンスをつかんでいきたいと考えています。Let' s Try!



大津 彬 工学部機械工学科 (2014 年度入学)

大山英語研修に参加して、様々な自分自身の変化、これからの課題を見つけることが出来ました。まず、大山英語研修に参加して英語に対するモチベーションがかなり高くなったと思います。なぜなら、今の自分の英語力ではまだまだ通用しないものだと深く気づかされたからです。初めは、自分の伝えたいことや言いたいことが他の参加者や TA に正しく伝わらないことが多々ありました。また、日常会話を聞き取ることができなかつたり、理解できなかったこともありました。しかしながら、日を追うごとに少しずつそういうことが減っていき、何か聞かれても少しですが返答することが出来るようになったり、ブルックス先生の少し長い説明を聞き取って理解できるようになった時は、とても気持ちがよかったです。特にリスニングに関しては、かなり聞き取れるようになったのではないかと実感できました。

また、分からない英単語ばかりを集めてオリジナルの単語帳を作るのは単語力を付けていくのによいものでした。6 日の英語研修だけでも 100 を超える単語がオリジナルの単語帳に書かれたので、単語力も付けていかなければならないと思い、研修が終わった今でも自分でノートに新たな単語を書いて覚えていくようにしています。

これらの出来事は、これからの英語を勉強するにあたっての糧としていきたいです。

そして、日本の文化についてまだまだ理解していないということにも気づきました。大山英語研修に参加するまで、私は日本の文化についてある程度知っているつもりでした。しかし、大山英語研修において初めて座禅をし、初めて精進料理を食べました。座禅は非常に心が落ち着き、精進料理は肉、魚、卵を使っていないにも関わらずとても繊細な味でした。このような体験は日本の文化を知るための重要な体験の一つであると思いました。そして、これらの体験を元に改めて日本の様々な文化について勉強しなければならないと思いました。将来、日本の歴史、文化、食べ物などについて外国の方に納得してもらえるような紹介ができるようになりたいと思いました。

大山英語研修に参加して本当にいろいろなことを知ることが出来ました。それに伴い、これからの自分の課題も見えてきました。これからも、さらなる精進が必要であると気づかされました。本当に参加してよかったと思います。





長崎 智菜 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

わたしは、この研修に参加する前、「英語を話す」ということにとっても抵抗を感じていました。自分の話す英語に全く自信が持てず、普段の授業などでも積極的に発言することがとても困難でした。しかし、これから大学で様々なことを学び、また、社会に出て働いていく上でも英語は不可欠です。一年生のこの時期から、しっかりと英語を学んでいくことが必要であると考えていました。そのため、この研修に参加し、積極的に英語を話すことでこれらにつなげていきたいと考え、参加しました。

実際に研修に行ってみて、参加者の皆さんレベルが高く、最初は全く聞き取れず大変な思いをしました。そこで気づいたことは、「英語で話す」ということでは、リスニング能力が必要不可欠であるということです。相手の話すことをしっかり理解していなければ、自分の言うことを考えることもできません。わたしは、研修に参加するまでは、自分の考えをどう発言するかということにとっても重きを置いていましたが、カンバーセッションをするという面では、相手のことをしっかりと受け入れることが重要であると気づきました。

また、次に、相手の話すことを理解したうえで私の話すべきことを考えるとき、話すべきフレーズはあまり多くないように感じましたが、単語力は必要であると感じました。何かを伝えるとき特に名詞がわからなければまったく伝わりません。いま、私に必要な能力は、案外基礎的なリスニング能力と単語能力という英語能力であると気が付きました。

この大山研修は、座禅・精進料理・アイスクリーム作りといった活動がありました。私は日本人として生きてきましたが、座禅を一度も体験した事はありませんでした。これから東京オリンピックが開催され、たくさんの外国の方が日本に来られることが考えられます。そこで、日本の文化を体験し、英語で説明できるように練習できたことはとてもよかったです。

この経験を生かして、来年・再来年は海外に挑戦していきたいと思います。



田邊 周 工学部社会開発システム工学科 (2014年度入学)

今回、夏期大山短期集中英語研修に参加してよかったと思う。自分自身、英語がかなり苦手に感じていたが、それがかなり和らいだと思う。

昔から英語に対して苦手意識を覚えていたが、そのため、英語を使うということに関して特に抵抗があった。今回の短期英語研修では授業はもちろん、日常生活までも英語を使わなくてはならないということで、最初はかなり不安を感じていた。自分の言いたいことを伝えることができるとは思えなかったからだ。しかし、実際に参加してみると、上手く伝えることはなかなかできなかったが、それなりに意思疎通を図ることはできたと思う。

また、いずれは直面するであろう、英語でのプレゼンテーション発表を実際に行ったことは非常に大きな経験になったと思う。日本語でプレゼンテーションをしたことは何度かあったが、英語でのプレゼンテーションは初めてだったので、パワーポイントのスライド作成の時に苦戦した。単語や言い回しが難しく、日本語独特の言葉を英語に翻訳して相手に伝えるということの難しさを痛感した。担当の教師の方やTAの方のおかげで、納得のいくものが完成したが、いずれはそのようなことを一人で完成させることができるようになりたいものだ。

それ以外には、日本文化について知ることができたのも大きな収穫になったと思う。仮に海外に行ったとしたら、おそらくではあるが自分の国の文化を紹介することがあると思う。その際にいざ紹介しようとしても、思いのほか自分の国や地元のことについて紹介できるほど詳しくはないと思う。今回の研修では、日本文化に触れることのできるカリキュラムが豊富に用意されていたので、日本の文化について深く知ることができたと思う。座禅の体験や精進料理を食べるといったような、普段経験できないような貴重な経験をさせていただいたことには感謝したいし、今回は地元の食文化についてのプレゼンを作ることだったが、その際にいろいろと情報を調べたりして、自分の知らなかったことがあったりして、見聞を深めることができたと思う。

自分はいずれ海外に行きたいと思っているので、今回の研修で学んだ、日常会話や自文化理解を活かしていきたいし、英語を積極的に使っていきたいと思う。



東谷 洸里 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

私がこの研修に参加した一番の動機は自身の英語力を向上させたかったからです。なので、研修期間中は積極的に英語で話していこうと思っていました。しかし、実際は、話し合いの場面や英語がとっさに出ない時などに、日本語で話してしまったり、自分から人に話しかけることに緊張してしまったりして、思い通りにはいきませんでした。そのおかげで、今以上に英語で会話ができるようになるためにどうやって英語を学び、身につけていけばよいか、自身のどのようなところを変えていけばよいかということについて気付くことができました。

今回の反省も含めて、今後どうするかということですが、この研修で学んだことを復習することは勿論のこと、研修中には洋書の貸し出しもあり隙間時間にはそれを読んでいたのも、何か一冊 CD が付属しているようなものを購入して、隙間時間にそれを読む、あるいは聞いたり英語で会話ができるようになるためにも普段から、英語では何て言うのだろうかと考えながら会話やメールをすることなどを習慣にしていきたいです。そして、それらの中で分からない単語などがあれば、ノートにまとめて、定期的に復習していきたいと思います。何故なら、そうすることによって英語の語彙力や会話表現を身につけることができ、自然と英語での会話ができるようになるのではないのかと思うからです。

私はこの研修を通して英語での会話をできるようにになりたいという気持ちがより一層強くなりましたが、そのためには上記のことをするだけではなく、自分も主に次の二つの面が変わらないといけないのだとも思いました。一つは英語で話しかけてみるという勇気と積極性を持つこと、もう一つは自分の英語に対する不安を持たないことです。一つ目の理由は最初から恥ずかしがらずに TA の方や先生に積極的に話しかけていけば、英語で話す機会もより多く、それだけ英語の練習ができただろうし、異文化交流もできただろうと思うからです。二つ目の理由は、返答するときや、話しているときに本当にこれで伝わるのか、なんて返せばよいかかわからないと考えてしまい、不安になってしまったがために、会話を続けることができなかったということがあったからです。

これらのことを実現することは難しいかもしれないが、少しずつでも踏み出していけば、その分だけ人は成長し、目標を成し遂げていけるので、実践し、諦めずに継続していきたいです。



箱谷 安耶 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

私は、この研修に参加してよかったと思えることは三つあります。一つ目は、毎日英語に触れることで英語に対する抵抗感が以前よりも少なくなったことです。以前は英語があまり好きではなかったのですが、この研修に参加したことにより、英語が少し好きになりさらに勉強しようという意欲が出てきました。それと同時に、今までの勉強不足であったということに気づかされ、これからは今まで以上に勉強していかないと英語力は向上しないと感じました。二つ目は、人前で話すことが以前よりも苦ではなくなったということです。以前は人前に出るのが嫌で、話し始めても緊張しすぎてしまうことがほとんどでした。しかし、今回の最終課題のプレゼンテーションにより人前に出て話すことが少し苦にならなくなってきたような気がします。また、このプレゼンテーションをやり遂げたことで自分に少し自信をつけられたのではないかと感じています。三つ目は、大山について学ぶことができたということです。私は、この研修に参加するまで大山についてほとんど知りませんでした。だから、大山寺で座禅体験をしたりみるくの里でアイス作りを体験したり、大山を近くで見ることができたりと本当に私にとっていい体験になったと思います。これらのことから、私はこの研修で英語についてだけでなくいろいろなことを経験し、学ぶことができたと思っています。

またその反面、改善していかなければならない点も見つけることができました。一つ目は、研修中あまり積極的に行動することができず、受け身になってしまうことが多かったということです。これを踏まえて私はもっと何事にも積極的に行動しないといけないと感じました。二つ目は、最終プレゼンテーションの時に質問にきちんと答えることができなかったということです。このことから、リスニング力が欠けているのだと改めて感じました。だからもっとリスニング力だけでなく英語力自体を改善させる必要があると感じました。

これらのことを改善してこれからもっと英語力を高めていきたいと思っています。そして、大学の海外プログラムに参加していきたいと考えています。私は、この研修により本当にいろいろなことを感じる事ができたので、参加してよかったと思っています。ありがとうございました。



平井 遥夏 農学部生物資源環境学科 (2015 年度入学)

今回私がこの研修に参加したきっかけは、「まずは国内から」という先生の言葉でした。英語を話せるようになりたい一方、海外に挑戦する自信が無かった私にはぴったりだと思い参加しました。英語漬けの一週間でしたが大山寺へ行ったりアイスクリームを作ったりと、大山を楽しみながら英語を学ぶことができました。また、幅広い学年が集まり、上級生と勉強できたこともいい刺激となりました。



英語力の向上について、一番効果があったと思うものはリスニング力です。この研修に参加するまではこんなに長時間英語を聞く経験が無かったのでついていけるか不安だったのですが、聞き続けるとだんだん慣れてきました。英語を聞いてもすぐ切れていた集中力も、持つようになりました。しかし映画をリスニングだけで理解するにはまだまだ難しかったです。TAさんのプレゼンテーションでは次々と変わる話題に追いつくのが大変でしたが、それぞれの出身国について学ぶことができました。また今回私が課題にしていた英語で話すことに対して、前よりずっと抵抗が無くなりました。普段の授業では話す機会はあまりないので自分の実力を知ってショックを受けましたが、同時にもっと勉強して話せるようになりたいという思いが強くなりました。食事の時には先生方やTAさんの隣に座って話そうと努力しました。自分の言いたいことが伝わった時はとても嬉しかったです。最初と最後の面接では、最初は頭に日本語しか思い浮かばず全く話せなかったのが、最後は質問に対して答えることができ、研修の成果を感じられました。そして基本的なことですが、敬語や文章の構成も学べ、文章については細かく先生方やTAさんに見てもらい指摘してもらえたのでよかったです。

今回の研修では言いたい単語がすぐ出てこないことが多々あり、もっと単語を身につけると共に英語を話す経験が必要だと感じ、英語学習のモチベーションアップとなりました。今はさらに挑戦したい気持ちが強く、次は海外での研修に参加しようと考えています。



米村 明敏 地域学部地域政策学科 (2013 年度入学)

今回研修の参加した理由は英語学習の学びなおしと一緒に勉強する仲間を作りたいという思いからでした。

当初の目的であった忘れかけていた英語学習の仕方を再確認できたのが一番の収穫でした。3 年生になり英語が必修科目でなくなったため、英語学習をするのが格段に減ってしまっていました。いざ英語を学習しようとしても、何に取り組んでよいか分からず、結局十分な学習ができませんでした。この研修ではブルックス先生のもと、スピーキング・ライティング・リーディングなど様々な学習法を指導していただきました。いい再スタートが切れた気がします。

また違う学部・学科、学年の学生と関わったのがよかったと思います。このプログラムは海外研修参加の前のステップとして参加する学生が多く、そのため 1 年・2 年生の参加が多かったのですが、4 年生や大学院生など、すでに海外を経験された先輩もいらっしゃいました。先輩方のお話や姿勢はとても参考になり、多くの学生の目標や参考になったと思います。

3 つ目は日本の文化を体験することができたことです。わたしは 2 度の海外経験やホームステイの受け入れをしたことがあるのですが、外国の人と関わる度に日本の文化について聞かれ、うまく話せない自分をもどかしく感じていました。しかしこの研修で、座禅をし、精進料理を食べることが出来たので、ひとつ話せることが増えてとてもうれしくなりました。また、日本のことを他国の人に伝えるというのは、自分の意見をクリアにしなければ伝わりにくいということが分かり、とてもよい勉強になりました。

研修は国内にしては長いプログラムだと感じていましたが、終わってみるとあっという間でした。英語学習、参加学生、日本文化などいろいろな場面で刺激を受け、モチベーションが上がりました。またこれを維持するのは難しいと思いますが、ここで得た仲間と連絡を取りながら、切磋琢磨して、これからがんばっていこうと思います。



富永 貴哉 農学部生物資源環境学科 (2014 年度入学)

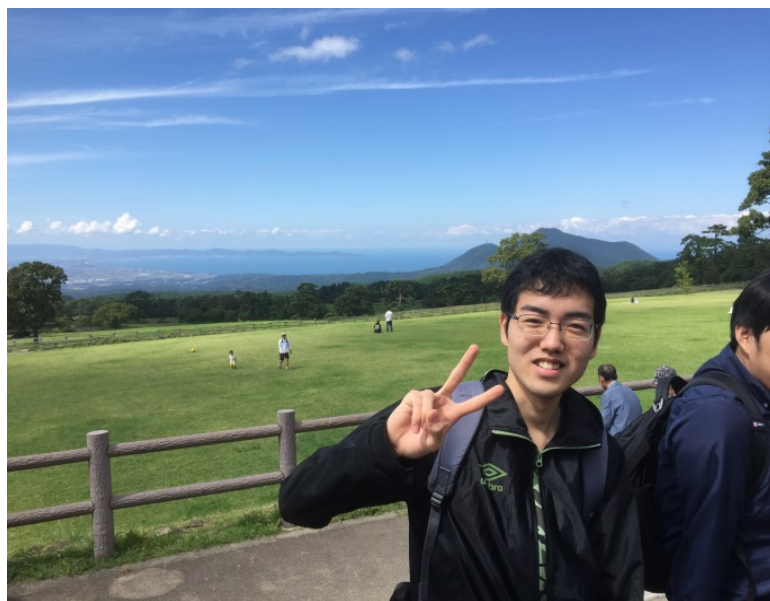
今回私は 2015 年度大山短期集中英語研修に参加しました。参加した理由は自分の英語の能力を向上させたかったのが主な理由でしたが、世界で活躍できる優れたグローバル人材になるためにはどのような能力が必要なのか知りたかったからでもあります。さらにこの研修は日本で行われ、しかも 2 万円程で参加できたので私にとっては大変魅力的な研修でした。

研修に参加する以前の私は、英語の能力を伸ばしたいものの、どう勉強すれば良いのかわからずにいました。さらに英語を習得したいという意欲もそれほどはありませんでした。ただ英語の授業のテストで良い点を取り、成績を良くしたいためだけに勉強していた様に思います。また、海外に対する興味や関心もさほどありませんでした。なぜなら海外に行かずとも、家にいればテレビや携帯から海外のニュースを知ることができたからです。

しかし、今回私が参加した研修ではブルックス先生や関野コーディネーター、そして海外から来た TA の方々から留学の話や諸外国の事情、それらの国々と日本との関係など、貴重な話や体験談を聞いていくうちに、海外に対する好奇心が大変刺激されました。特に、フランクコーディネーターのウガンダでのプログラムについてのプレゼンテーションは、私の好奇心を非常にくすぐりました。そのためか、できれば来年にでも海外に足を運びたいと思えるようになりました。今では、私が初めて行く国はどこだろう、と楽しみにしています。

また、6 日間英語に囲まれた環境で過ごす中、TA の方々を含め、多くの人と英語でコミュニケーションを取り、親しくなっていたことを実感して嬉しく思ったことを覚えています。先に述べた様に、私は今まで TOEIC や授業でも、テストの点数を高くするために勉強していました。しかし、今回の研修に参加して、英語を勉強することの目的は、英語で多様な人々と関わり協力し合い、自らの視野を広げていくことなのではないか、と気づきました。

今回の研修で、私はたくさんの事を学びました。また、多くの発見もありました。これらの事を忘れないため、そしてこれからの学習に活用するために、研修中に作ったノートを見返していきたいです。さらに、英語を話してたくさんの人々と出会い、グローバル人材として成長していけるように英語の勉強を継続して、かつ実践的に勉強していきたいです。



**【お問い合わせ先】**

鳥取大学グローバル人材育成推進室

〒680-8550 鳥取市湖山町南 4 丁目 101

TEL 0857-31-5359

ホームページ : <http://global.ciatu.tottori-u.ac.jp/ja>

Facebook : <https://www.facebook.com/tottoriglobal>